

石川県埋蔵文化財情報

第 9 号

巻頭図版（鳳至町畠田遺跡・矢田野遺跡）

平成14(2002)年度上半期の発掘調査から
発掘調査概要報告

調査部長 小嶋 芳孝 (1)
調査部調査課

鳳至町畠田遺跡	(3)
塩津遺跡	(5)
吉田南側 B 遺跡	(6)
館開テラアト遺跡	(8)
東的場タケノハナ遺跡	(10)
八野 B 遺跡	(11)
小松城跡	(13)
矢田野遺跡	(15)

平成14年(2002)度上半期の遺物整理作業

企画部整理課 (17)

調査研究・報告

弥生時代における影響関係について	久田 正弘 (20)
第4回石川の発掘展「七尾湾の縄文世界」の記録	小嶋 芳孝 (29)

資料紹介

加茂遺跡における弥生時代の水田跡の紹介	松尾 実 (31)
---------------------	-----------

2003年3月

財団法人 石川県埋蔵文化財センター



遺跡遠景



井戸



周溝内出土土器



周溝内出土土器

平成14(2002)年度上半期の発掘調査から

調査部長 小嶋芳孝

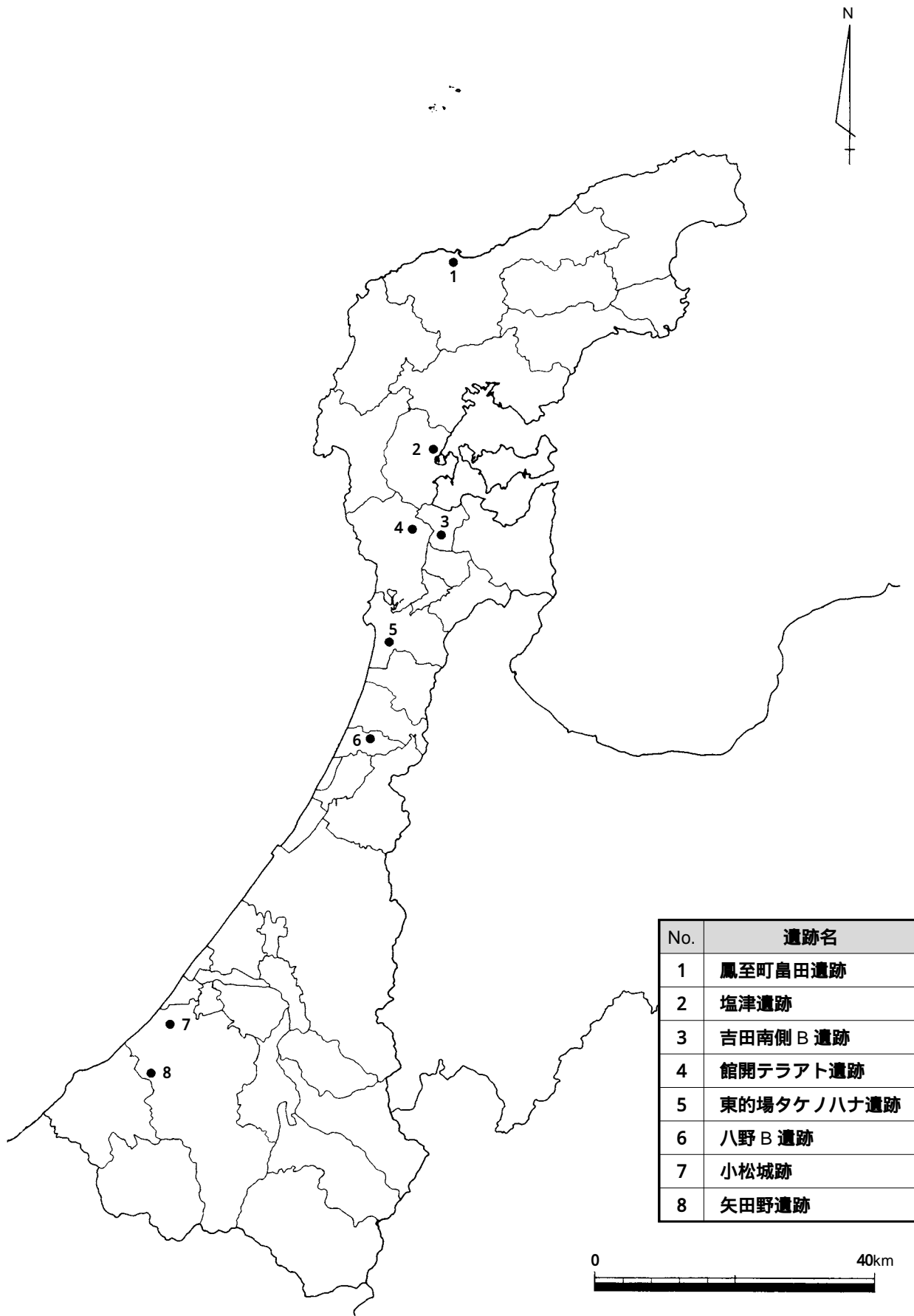
平成14(2002)年度は、県教委から23遺跡の調査を受託した。当初計画の調査面積総計は、60,570㎡である。内訳は、国土交通省事業に伴う調査が2件、県農林水産部関係が12件、県土木部関係が7件、総務部と県教育委員会関係が各1件である。

本書では4～8月の調査を主に紹介する。輪島市の鳳至町畠田遺跡では、北陸財務局輪島宿舎の建て替えに伴って400㎡を調査した。8世紀後半～9世紀初頭の井戸や掘立柱建物跡などを検出した。井戸は、一辺約150cmの横板を井籠組にした構造で、この遺跡が官衙的な性格を持っていたことを示唆している。輪島市街地での発掘調査は事例が少なく、鳳至郡の古代史を考える上で重要な調査となった。

羽咋市東的場タケノハナ遺跡は、平成13(2001)年度の調査で弥生時代中・後期の環濠集落だったことを確認している。今年度は、環濠外縁部にあたる先の調査区の北側を調査し、掘立柱建物跡などを検出した。北西にある吉崎・次場遺跡との関連も含め、弥生時代の能登を考える上で興味深い調査になった。

小松市小松城跡では、小松高等学校の校舎改築工事に伴う第三次調査を実施した。今回の調査では16世紀代の溝から宝篋印塔が出土し、溝の周囲から火葬骨を検出している。小松城の築城以前には墓地だった可能性があり、小松城の築城過程を知る上で重要な調査となった。

小松市矢田野遺跡では、県営ほ場整備にともなう調査を実施した。排水路工事予定箇所を主とする狭い範囲の調査だったが、掘立柱建物5棟以上や竪穴住居2棟を検出している。矢田野遺跡では6世紀代の古墳も多数築造されており、今次調査でも古墳の周溝と思われる遺構を検出している。また、7世紀中頃の竪穴住居では、オンドル状遺構(L字型カマド)を検出している。この遺構は昨年度の調査でも確認しているが、オンドル付設住居を多数検出した小松市額見町遺跡は本遺跡の北東約2kmにあり、地形的には柴山瀧に臨む同じ台地の上に立地している。額見町から矢田野にいたる広範囲な台地上に、渡来系集団が集落を営んでいたようである。

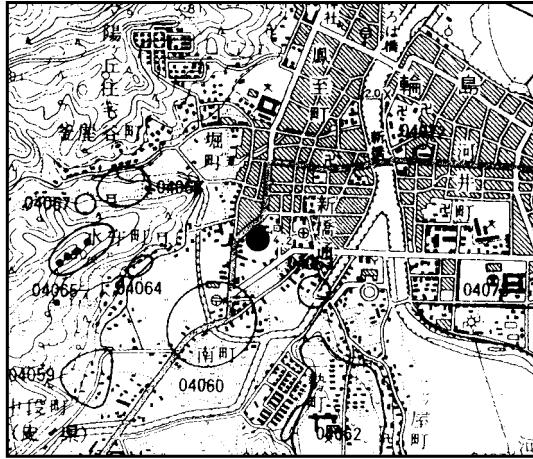


No.	遺跡名
1	鳳至町畠田遺跡
2	塩津遺跡
3	吉田南側 B 遺跡
4	館開テラアト遺跡
5	東的場タケノハナ遺跡
6	八野 B 遺跡
7	小松城跡
8	矢田野遺跡

掲載遺跡位置図

ふげ し まち はたけ だ い せき
鳳 至 町 畠 田 遺 跡

所在地 輪島市鳳至町畠田地内
調査面積 400m²



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



調査区位置図 (S = 1 / 1,000)

調査期間 平成14年4月25日～平成14年6月20日
調査担当 端 猛 谷内明央

鳳至町畠田遺跡は鳳至川下流域の海岸平野に立地する集落遺跡である。本調査は北陸財務局輪島宿舎3号新築工事に係る発掘調査である。調査区には以前木造宿舎が建っており、2号棟宿舎建築に伴い解体撤去され、その際に受けたと思われる攪乱が調査区全体に認められた。遺構検出面は標高4.3～4.7mを測り、北東方向に傾斜する。

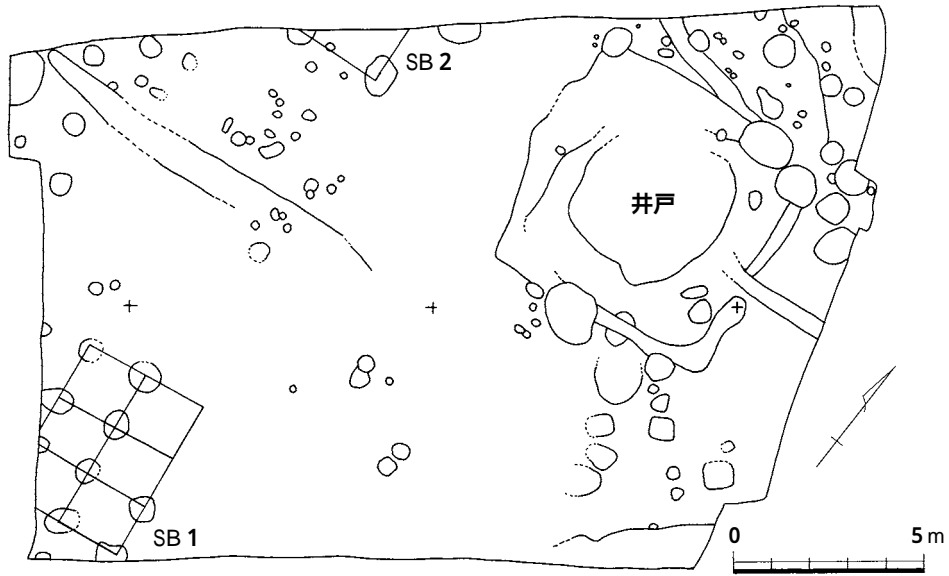
井戸、掘立柱建物、溝、土坑、小穴等を検出した。井戸は調査区中央北寄りに位置する。形状は掘方平面がやや南に出張る隅丸方形を呈し、断面が撻鉢状に緩く傾斜して井桁上端に至る。井戸の種類は木側の横板組井管組であり、長さ1.48～1.68m、幅25～28cmを測る板材が4段組まれていた。規模は掘方が上端径3～3.3m、下端径2～2.2m、深さが掘方～井戸桁上端1.2m、さらに底面まで1mを測る。埋土は暗褐色～暗灰色粘質土を基調とし、井桁上端付近から次第に腐食質を多く含むようになり、最下層に至る。掘方埋土は地山ブロックが混じる濁灰色粘質土を基調とする。底面は砂質土であり、湧水が激しかった。井戸部材の他、須恵器の蓋・杯・甕・壺、土師器の椀、曲物等が出土し、井戸底面で完形の土師器の椀が2点出土した。井戸祭

祀関連遺物の可能性がある。遺物の主な時期は8世紀後半～9世紀初頭と考える。

井戸の周囲を方形に巡る溝を検出した。北西隅部は推定幅1.2m、深さ1m、その他の部分は幅30～70cm、深さ10～30cmを測る。北西隅部は攪乱を受けているものの遺構残存状態は比較的良であったが、その他の部分は旧宿舎の基礎部分と位置が重なるために大きく攪乱を受けていた。北西隅部は2段状に掘り込まれていた。埋土は暗褐色粘質土を基調とする。井戸とほぼ同時期の須恵器の蓋・杯、土師器の椀等が出土した。

掘立柱建物を2棟検出した。SB1は調査区南端に位置する。規模は3間×2間(1.8m×1.4～1.5m)を確認した。北東隅部は廃材に切られていたが、そこに柱穴2基が存在したと思われる。主軸は南北方向である。柱穴は円・楕円形を呈し、径80cm前後、深さ20～30cmのものがほとんどである。埋土は暗褐色粘質土を基調とする。総柱であり、倉庫の可能性がある。SB2は調査区中央西側に位置する。柱間は2.2mを測り、主軸は南北方向である。柱穴は円ないし楕円形を呈し、東柱穴径1m、深さ90cm、西柱穴径75cm、深さ58cmを測る。埋土は暗褐色粘質土を基調とする。井戸とほぼ同時期の須恵器の蓋、土師器の椀等が出土した。

本調査によって、今まで不明な点の多かった輪島市街地における古代の遺跡様相の一端を知ることができた。
(谷内明央)



調査区全体図 (S = 1 / 200)



調査区全景 (南西から)

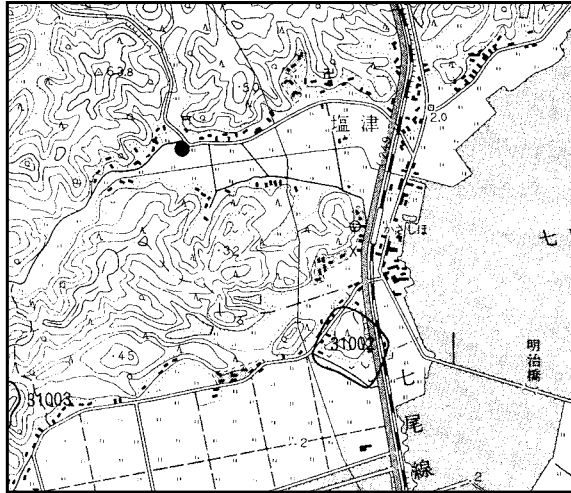


SB 1 (北から)

しおづいせき 塩津遺跡

所在地 鹿島郡中島町塩津地内
調査面積 250m²

調査期間 平成14年7月1日～同年7月15日
調査担当 端 猛 谷内明央



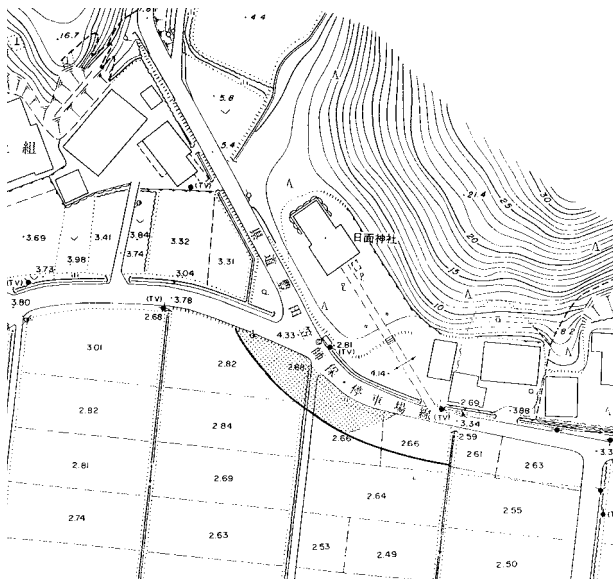
遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

塩津遺跡の所在する鹿島郡中島町塩津は、能登半島中央部七尾西湾西岸に位置し、北は中島町笠師、南は田鶴浜町大津と接する。集落は塩津川流域に開析した小谷と西湾の埋立地に展開している。塩津遺跡の発掘調査は一般県道豊田笠師停車場線の道路改良工事により実施されることとなった。中島町の沿岸地域をほぼ南北に貫く国道249号線から内陸の豊田方面へ抜ける生活道路である県道豊田笠師停車場線は幅員が狭く、車輛の交差は容易ではない。調査区はその県道が笠師方面へ向かう手前、丘陵の裾を切り一部盛土して作られている現県道の南側に位置する。

調査では、田面より約1m下から古代の製塩土器を中心に時期差のある遺物が同一の層から出土している。そのほとんどが調査区西半からの出土であり、調査区西端に行くほどその量は多くなる。しかしながら、一部田面より約2m下まで掘削したが安定した地盤はなく腐食した植物の層が続いており、明確な遺構は確認されなかった。塩津遺跡の南側に広がる田面はかつての入江を埋め立てたものであるといわれ、近年のほ場整備工事の際にも軟弱な地盤に悩まされている。今回の調査区は塩津遺跡の縁辺部にあたると思われるが入江と関わった人々の生活を窺い知る資料を得ることができた。(端 猛)



調査区全景 (東から)



調査区位置図 (S = 1 / 2,000)

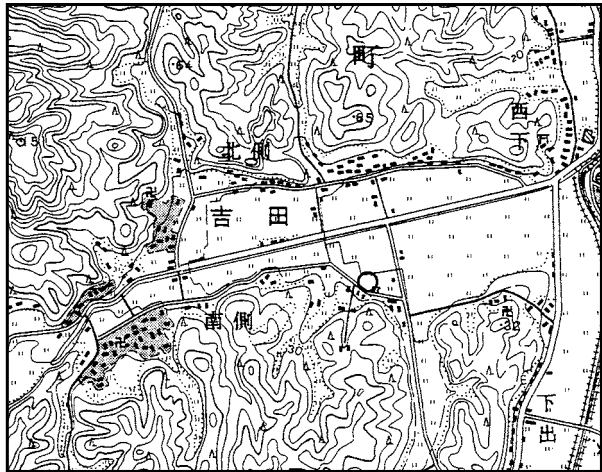


調査区全景 (西から)

よし だ みなみ がわ い せき
吉田南側 B 遺跡

所在地 鹿島郡田鶴浜町字吉田地内
調査面積 550m²

調査期間 平成14年6月12日～平成14年7月24日
調査担当 白田義彦 林 大智



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

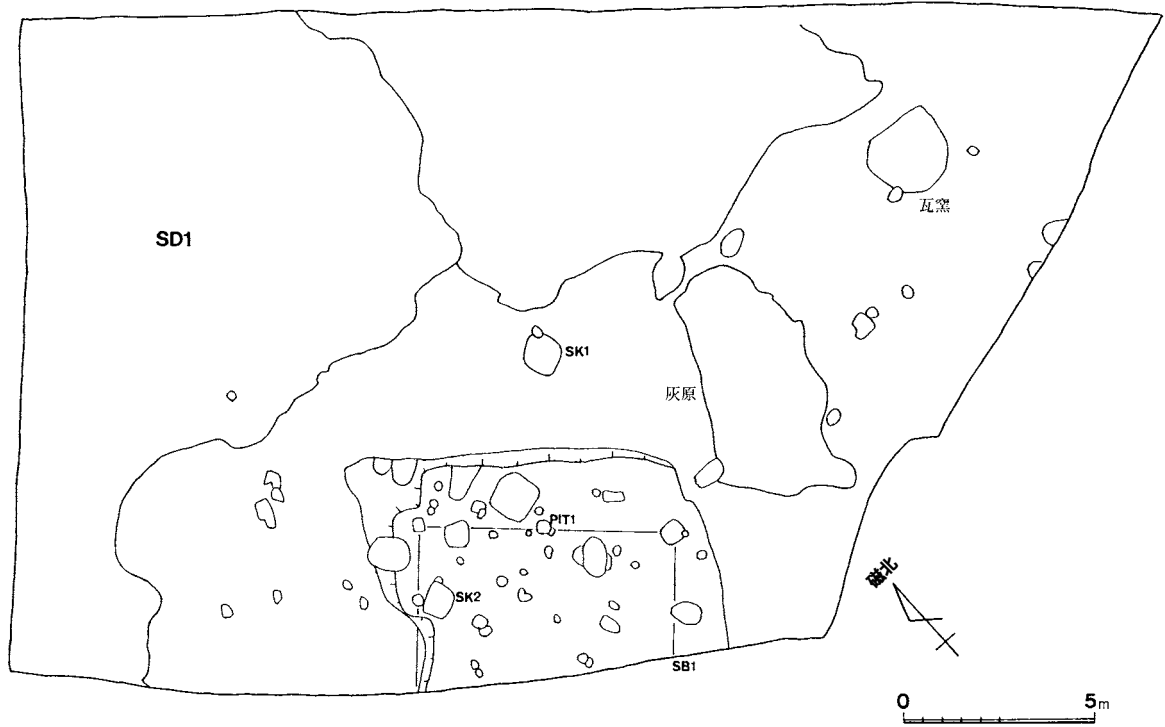
本遺跡の発掘調査の契機は県営ほ場整備事業によるものである。昨年度も調査(550m²)を行っており、古墳時代の竪穴建物・布掘建物、奈良～中世の掘立柱建物などを検出している。本年度の調査区は昨年度の調査区から、西へ約100mのところ、山裾に位置し、現集落内に近いところである。本調査区周辺の地形を概観すると、南側は山側で、北側は緩やかに下り、東側、西側ともに緩やかに下る地形である。このように小高く、見晴らしがきく比較的条件の良い場所に立地する。調査前の状況は盛土(厚さ約1m)がされており、畑として使われていた。

調査区内で比較的遺構密度が高い箇所は調査区南側の基壇状を呈するやや高いところである。この高い箇所の北側の段には土留めと思われる杭列が検出されているので、後世の水田造成のため北側は削平されたものと考えられ、削平前は北側にも遺構は展開していたものであろう。したがって、SK1のような深い遺構しか残らなかったものと思われる。一方、西側の段は緩やかなもので、水田造成による削平ではないと思われる。

主な遺構は平安時代と思われる掘立柱建物(SB1)・鞍部(SD1)、中世の土坑(SK2)、近世の井戸(SK1)、明治期と思われる瓦窯とその灰原である。SB1の柱間は3mを超えるものもあり、特異なものである。PIT1から礎板を検出したが、他の柱穴から柱、礎板等は検出されなかった。SD1の検出部の最大幅は約10m、最深部の深さは約1mであり、完掘時の幅・深さの値は共により大きくなる。SD1からは古墳時代の土器、平安時代の土器などが出土している。SK2は約80×80cmの隅丸方形プランを呈し、深さは約60cmであり、底から珠洲焼の片口鉢が正位で出土した。SK1は約1×1mの方形プランを呈し、深さは約1mであり、底の方から黒地に朱の模様を描く漆片が二個体分出土している。瓦窯の北側は後世の削平を受けているが、平面プランは焼土面を含めると2×2mの略方形を呈するものと思われ、レンガ状のブロックを4列検出した。灰原の遺物の大部分は瓦であるが、窯道具と思われるものも出土している。また、本調査区の南側の道路をはさんだ山際に瓦を焼いた登り窯の跡がみられる。

その他、時期不詳の土坑が4基検出された。それぞれ、円形、方形に近いもので、長軸は約0.8m～1.2mにおさまる。深さも60cm前後の比較的浅いものである。目立った出土遺物はなかったが、それら土坑のなかの一つから、板切れ、石、自然木などがまとまって出土したものもある。比較的掘方のしっかりした浅い土坑が多く検出されたといえよう。

古墳時代の遺物は存在するが、その時期の遺構はみられない。活動が活発化するのは平安時代からであり、その後中世、近世、近代と営みの跡が検出された。いわゆる中山間地域での営みの一端が垣間みえる。
(白田義彦)



調査区全体図 (S = 1 / 200)



完掘状況 (北東から)



SB1 と土坑群 (北東から)



SK2 の片口鉢出土状況 (東から)

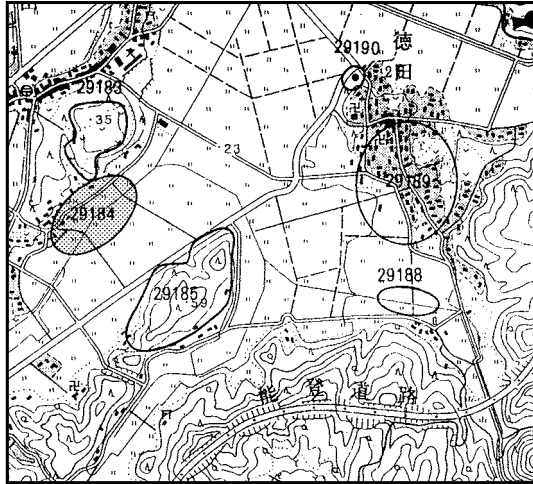


瓦窯完掘状況 (北から)

たち びらき い せき
館 開 テ ラ ア ト 遺 跡

所在地 志賀町館開地内
調査面積 900m²

調査期間 平成14年6月24日～同年9月10日
調査担当 本田秀生 湊屋玲美 谷内明央



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

館開テラアト遺跡は志賀町館開地内に所在する。昨年度調査された館開野開遺跡の上流に位置し、館開集落が広がる丘陵の東側裾部に広がっている。発掘調査は県営ほ場整備事業土田地区に係るもので排水路、およびパイプライン敷設工事にかかる約900m²を調査した。

調査区は丘陵の裾を巡るA～D、F区と現仏木川堤防に沿うE区、これらを繋ぐG区に分けられる。E区はそれを横切る農道とG区接点を境とし、東側、中央、西側の3つに分かれている。

A～D区、E区東端、F区東端、G区北端では旧仏木川の流路を確認した。特にD区東端、F区東端、G区北端ではその肩部を捉えることが出来た。確認され

た流路のほとんどが近世以降の流路だが、F区東端で捉えた肩部は、近世以降の堆積土の下に中世の堆積土が確認された。中世段階の流路も調査地の北東部付近から丘陵の裾を沿うように流れ込み、F区東端付近で丘陵からやや離れて行くように蛇行して流れ、E・G区で確認された遺構群と、F区で確認された遺構群を分かちものであることが理解できた。

E区東側から中央東側は、階段状に平坦面があり、幅員の狭さから判断は難しいが、水田と考えている。中央西側では柱穴、溝等が確認され、集落域と思われる。この西側では再び落ち込み、G区接点付近で一旦立ち上がり、ここには石組みの遺構の残欠と溝が確認された。この西側で再び落ち込み、また、立ち上がる。この立ち上がりから再び平坦面が続き、柱穴、土坑、溝、井戸等が確認された。西側西端では再び落ち込み、平坦面が続く。これも水田跡と思われる。この中央部付近での起伏がどのようなものか判断できないが、底に砂層の堆積が確認できない事から流れを持つものではなさそうである。井戸は素堀で坑底付近から漆器、独楽などが出土している。

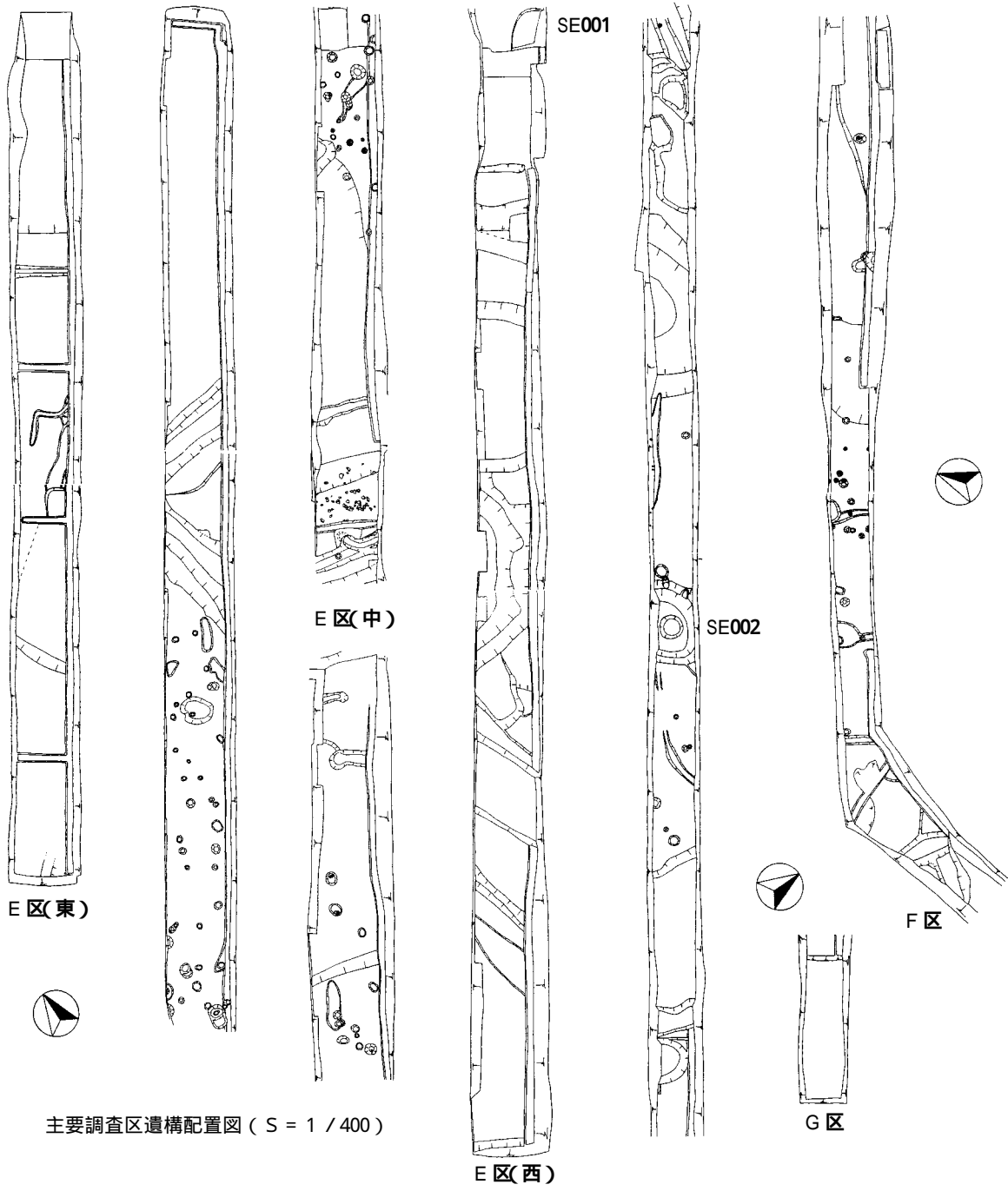
G区は南端付近に落ち込みがあり、覆土中から多量の礫が出土した。石組み遺構が壊されて投げ込まれたものと考えている。この落ち込みから北側では柱穴、溝、井戸が確認され、井戸から漆器が出土している。E区、G区で確認された遺構はすべて中世の遺構である。13世紀～15世紀のものが含まれる。また、E区、G区とも一番標高の高い部分は遺構が削平されており、本来はかなり起伏が激しかったと想像される。

F区はその西側が設計変更により削平を免れることとなり、遺構検出までで止めている。柱穴、土坑、溝等が確認され、遺物も他調査区に比べ多い。ここでは中世の他に古代の遺物も出土している。

F区東側では旧流路の肩部で石組み遺構が確認された。ここでも上部は削平を受けている。しかしこの下位にはさらに古い段階の堆積層が確認されている。調査区の東側に斜めに鞍部が走り、その肩部から高い部分にかけては柱穴、溝等が確認されている。遺物は古代のものも少量出土している。

今回の調査から、遺跡は旧仏木川を挟んで現集落側に展開する地点と、現仏木川を中心とする地点の二つの纏まりがあることは判明した。

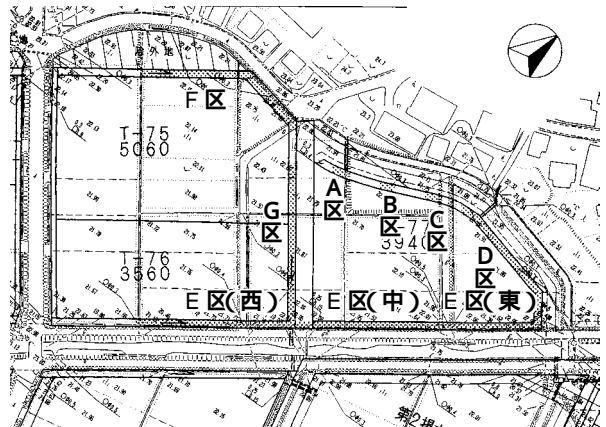
館開地区の遺跡は、昨年度調査の館開野開遺跡を含め、狭い低地部に複数のブロックが点在して存在し、そのあり方は他の地域と様相が異なり注目される。 (本田秀生)



主要調査区遺構配置図 (S = 1 / 400)



井戸完掘状況 (G区)

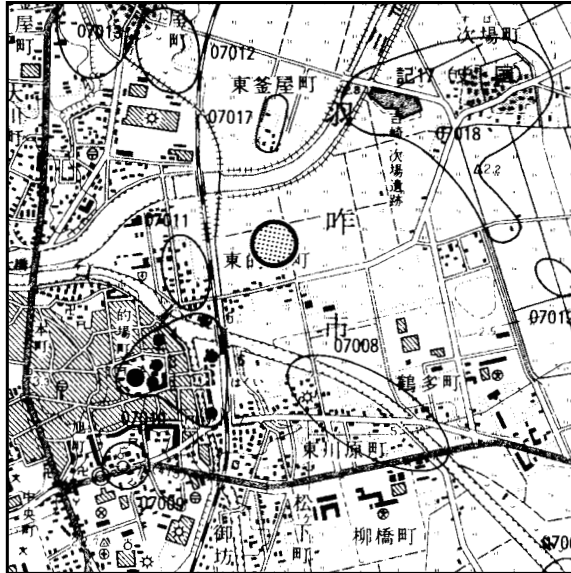


調査区位置図 (S = 1 / 300)

ひがし まと ば い せき 東 的 場 タ ケ ノ ハ ナ 遺 跡

所在地 羽咋市東的場町地内
調査面積 1,300㎡

調査期間 平成14年5月7日～同年6月20日
調査担当 白田義彦 林 大智



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

東的場タケノハナ遺跡は、羽咋市街地の東側一帯にひろがる低地部に位置し、羽咋川と子浦川の合流地点に程近い微高地上に立地している。

本遺跡の北東約500mには、口能登地域における弥生時代の拠点集落として著名な吉崎・次場遺跡が所在する。また、周辺の河川流域には、同時代の中小規模遺跡が散在しており、吉崎・次場遺跡を核とした遺跡群が形成されており、互いに密接な交流が行われていたことを伺える。

発掘調査は、邑知地溝帯農地防災事業、農免農道整備事業に伴うもので、平成13(2001)年度の調査では、建物跡や土坑などの遺構が密集する空間の周囲に3条の環濠を掘削した、弥生時代中・後期の環濠集落跡を確認した。

今年度は、平成13年度調査区の北側部分(面積1,300㎡)の発掘調査を実施し、掘立柱建物跡2棟、土坑1基、ピットなどの遺構を検出した。遺構面は、調査区南端から北端に向かい緩やかに下る傾斜をもち、調査区中央部には鞍部を確認した。ほとんどの遺構は、この鞍部より南側に集中している。

掘立柱建物1(SB01)は、梁行1間×桁行1間で、1辺2.6m程度の小規模な建物跡である。2箇所柱穴には、径約10cmの柱根が遺存していた。掘立柱建物2(SB02)は、調査区南端で確認した梁行1間の建物跡で、桁行は調査区外にのびる。SB01とほぼ同規模である可能性が高い。柱穴1箇所には柱根が遺存していた。どちらも外周溝が削平された平地式建物跡である可能性が高い。

土坑1(SK01)は、平面形が不整円形を呈し、長径で130cmを測る。断面形態は緩やかなU字形で、覆土からはごく少量の弥生土器片が認められたが、詳細な時期は不明である。

遺物は、遺構と包含層をあわせても、少量の弥生土器片が出土するに留まった。

今年度の調査区では、鞍部を境にして遺構が明瞭に途切れることや、環濠帯の外部にも掘立柱建物や土坑が存在することなど、弥生時代における環濠集落跡外縁部の様相が具体的に明らかになった。今後、各遺構の帰属時期を明らかにして、より具体的な集落像の把握に努める必要がある。

(林 大智)



調査区南半部遠景

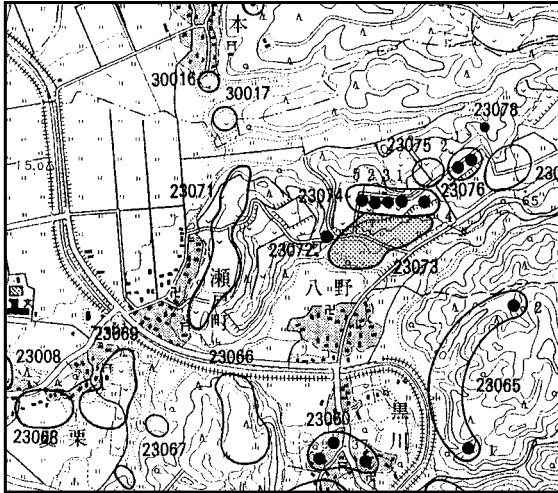


掘立柱建物1(SB01)

はちのいせき 八野 B 遺跡

所在地 高松町八野地内
調査面積 530m²

調査期間 平成14年5月7日～同年6月20日
調査担当 本田秀生 加藤克郎



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

八野 B 遺跡は高松町八野地内に所在する。遺跡は旧加賀国と能登国を分かつとされる大海川右岸の丘陵に位置し、丘陵上位には八野ウワノ古窯跡群が展開している。

発掘調査は中山間地域総合整備事業（大海地区）に係るもので、西側の水田面の工事に係わる調査区（以下、面調査区）および東側の排水路工事に係わる調査区（以下、南北、東西排水路調査区）をあわせ530m²を調査している。

遺跡周辺は南向きの緩斜面であるが、度重なる耕地整理により旧地形が判然としなくなっている。面調査区と、排水路調査区の間には小さな谷が入り込

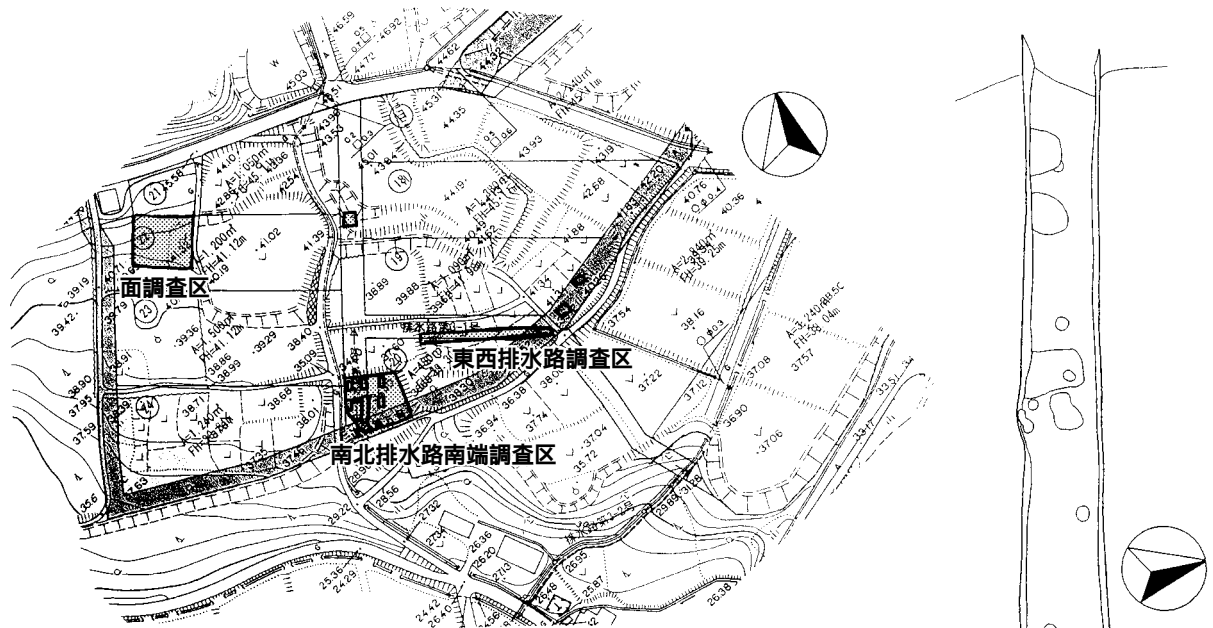
み、作業員さんからの聞き取りによれば、かつてその谷頭には湧水があり、また、やや下った地点に井戸の名残が確認できる。発掘調査では、東側の排水路調査区は削平が著しく、近世以降と思われる畑の区画溝や畝溝を確認したにとどまる。また、西側調査区の一部はかつての林道工事による排土で造成されたものと判明した。

面調査区では縄文時代から近世の遺構、遺物を確認した。遺構検出面は北から南に向かったの緩斜面である。風倒木痕が調査区全体に点在している。斜面上方は遺物が散発的に出土したにとどまる。傾斜のやや緩やかとなる斜面下方では奈良時代頃と思われる柱穴、縄文時代のおとし穴、土坑等が確認された。柱穴は、掘立柱建物と思われるが、調査区南東隅で確認され、その配列、規模等は確認できていない。おとし穴は長辺2.8m、短辺1.2mの長方形を呈し、深さは0.7mで坑底の中央に小穴が穿たれている。土坑は風倒木に上面を壊されているが、径0.7m程の円形を呈し、深さは0.3mほどである。上面には径30cm程の礫が置かれ、掘り進むとその下位にもう一点礫が置かれていた。

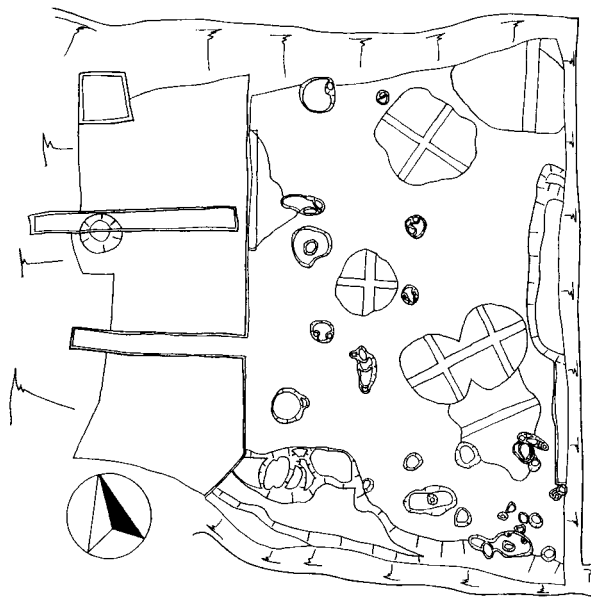
この他、元の八野集落に係わるとと思われる、柱穴や土坑等が確認されている。遺跡の中心は、傾斜がさらに緩やかとなる調査区下方にとと思われる。

遺物は、縄文土器、須恵器、土師器、珠洲焼、陶器・磁器の他、礫石錘、磨製石斧などが出土している。縄文土器は中期頃、須恵器等は8世紀後半頃と思われる。

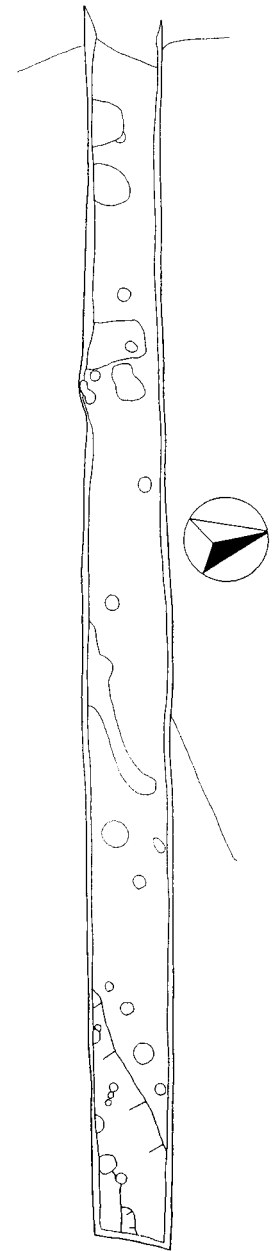
八野集落は、現在の位置に集落が移る以前は、今回の調査地点付近に家が数軒あったと言い、小字名にも何々屋敷と称するものがみられる。調査の合間に付近を歩くと石垣の跡や平坦面を見ることが出来た。また、作業員さんからの聞き取りによれば、近くにある八野集落の墓地は、もう少し山手にあったものを柿木団地造成に伴い移転したもので、そこに残る五輪塔もその時移したものである。遺構こそ確認できなかったが、出土した珠洲焼がこれらに絡む可能性があり、八野集落の初源がこのあたりに存在した可能性も窺えることとなった。南北排水路南端調査区の付近にある切り通しは、押水町野寺に向かう古道とも言われ、排水路調査区と面調査区の間を走る農道も、家々の間に延びる道であったと伝えている。付近には江戸期あるいはそれを遡る集落の遺構が展開している可能性が高い。それらは盛り土保存されることとなるが、その景観は、今回の整備事業で大きく変貌し失われることになる。
(本田秀生)



調査区位置図 (S = 1 / 2 000)



面調査区全体図 (S = 1 / 200)



東西排水路調査区全体図
(S = 1 / 200)



面調査区完掘状況



おとし穴完掘状況

こまつじょうせき 小松城跡

所在地 小松市丸内町地内
調査面積 700㎡

調査期間 平成14年5月9日～同年6月28日
調査担当 松山和彦 西田郁乃 青柳佳奈

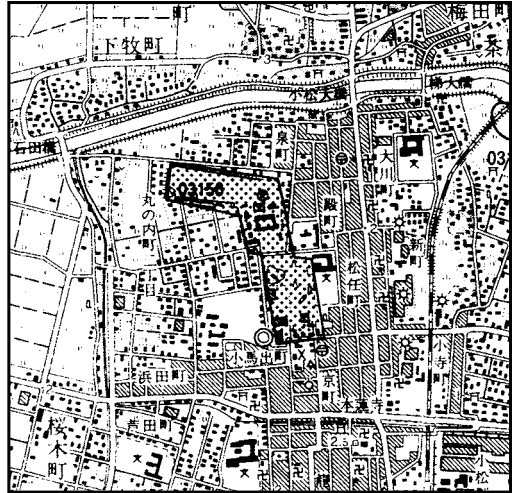
小松城跡は梯川の南側に位置する。城周囲を何重にもめぐる堀には、この梯川から引き込んだ水が湛えられており、この事から「浮城」と呼ばれていた。村上・丹羽両氏の居城を経たのち、江戸時代に入り加賀藩3代藩主前田利常は隠居城として晩年の20年間を小松城で過ごした。利常逝去後、城主不在の状況が約200年あまり続く。明治維新後、三の丸跡地に移された金平徒刑場の役務として、城の取壊し、堀の埋め立てが行われ、明治32年には二の丸跡地に旧制第四中学校（現在の小松高校）が建てられた。現在、本丸、二の丸跡地には小松高校が建っており、本丸櫓台の石垣だけがその姿をとどめている。

本調査は小松高校の校舎改築工事に伴うもので、今回は第3次調査である。第1次調査では、二の丸の石垣、二の丸と本丸の間の堀、本丸東南隅にある石垣の根石と思われる石列などが検出され、第2次調査では16世紀代に比定される井戸、建物跡、土坑、溝などが検出された。

今回の調査区は第1、2次よりも南に位置し、3地区に分かれている。調査箇所は天明6年（1786年）頃に描かれたと考えられている「小松城内分間絵図」では二の丸内にあり、三の丸から本丸への通路にあたる。

1区での調査では、旧制第四中学校の建物の基礎が調査区内を区切るように検出され、その間から建物の礎石2基、井戸、土坑、溝などが確認された。溝は南北方向に流れ、途中西へ緩やかに曲がる。溝は調査区外まで広がり、東岸は確認できたが西岸は未確認のため、規模は不明である。この溝からは、16世紀代の遺物が出土しており、底からは凝灰岩製の宝篋印塔の相輪が出土している。周囲では火葬骨と思われる骨片も多数出土している。築城以前この付近は墓地であり、溝は自然河道の一部を埋め立て整備した丹羽氏以前の城の堀と推定される。さらに寛永年間の郭の拡張に伴い埋められたのではないかと考えられる。礎石は南北に5mの間隔で検出された。北側の礎石では柱の一部と思われる木片が見つかった。寛永の整備以降に建てられた門跡ではないかとも考えられる。

2-A区は、溝と土坑を検出した。溝は1区と同様、南北方向に主軸をとるもので、石臼や16世紀代を中心とした遺物が出土した。一方2-B区は現在の小松高校建設工事などにより攪乱を受けていたが、攪乱土中からはいぶし瓦が出土した。黒灰色の素焼きの瓦で、小松ではいぶし瓦が江戸時代前期に始まったとされている。



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



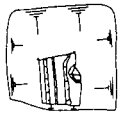
調査区位置図 (S = 1 / 5,000)



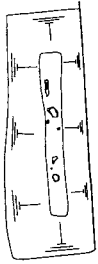
礎石 1 (西から)



礎石 2 (西から)



2-A区



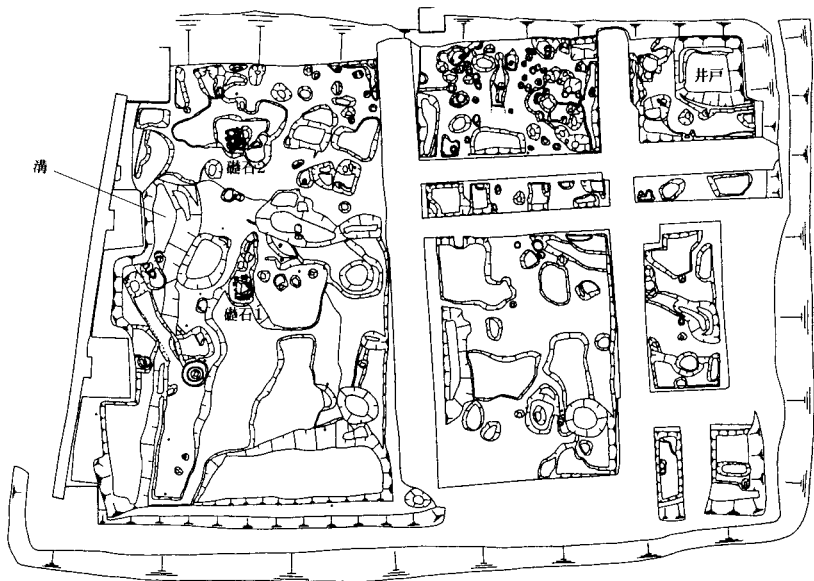
2-B区



1区 (北から)



1区



調査区平面図 (S = 1 / 250)

や た の い せ き 矢 田 野 遺 跡

所在地 小松市矢田町、矢田野町、月津町地内

調査期間 平成14年5月7日～同年8月20日、
平成14年11月25日～同年12月24日

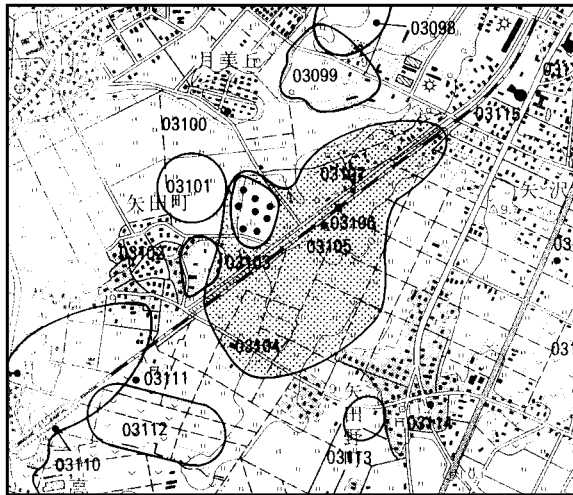
調査面積 1,350㎡、500㎡

調査担当 澤辺利明 安中玲美 宮川勝次

矢田野遺跡は小松市の南部地域に広がる月津台地上に立地している。この台地のほぼ中央部には、柴山瀧に注ぐ馬渡川によって形成された開析谷が入り込んでおり、遺跡はこの谷中央部の台地縁辺に立地している。

発掘調査は、県営ほ場整備事業を原因として、これまでも調査が行われており、古墳時代から江戸時代までの遺構・遺物を確認している。今年度は古墳時代から古代の建物跡や古墳の周溝等を検出している。

なお、調査の便宜上、調査区をA区～G区に分けている。以下、概要を述べる。



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

建物跡は掘立柱建物を9棟以上、竪穴住居を10

棟検出している。A区では掘立柱建物5棟以上、竪穴住居2棟を検出しており、その内の6間×3間以上(平成13年度調査区を含む)の掘立柱建物は柱間距離が約2mであり、柱穴掘方は約80cm四方、深さ約60cmの方形である。柱穴の土層断面からは柱痕が鮮明にみられ、柱痕部分の床面は柱の圧力により硬くしまり、少し窪んでいる。柱穴からは土器片の他に、牛もしくは馬の顎骨と歯が出土している。出土遺物が乏しいため、時期決定には至っておらず、今後の検討を要する。また、調査区外に延びると思われる1間×1間の掘立柱建物は、柱穴掘方が直径約50cm、深さ約30cmであり、この建物に近接した小穴からは8世紀後半の坏底部が出土しているが、建物の時期が不明のため、建物とピットの関係は判断しがたい。7世紀中頃と思われる竪穴住居は、1辺約7.5m(平成13年度調査区を含む)の方形をしており、西壁にL字型のカマドを有する。支柱穴は判然としないが、壁際に小穴が並んでいる。側柱であろうか。その他、古代に属すると思われる竪穴状遺構は、炉跡を有し、周辺からは焼けた土器が出土している。また、近接して金床石を確認しているが、竪穴状遺構との関係は不明確である。

G区では掘立柱建物1棟、竪穴住居4棟を検出している。竪穴住居のほとんどが調査区外に延びるため全形をつかむことは難しいが、その内の1棟は約4m四方の方形であり、4本支柱と考えられる。内部には2個体分の土師質の甕が、一括して出土している。その他、E区とF区北東側からも建物跡を数棟確認している。

古墳はB区とF区南西側で検出しているが、調査区の制約上、周溝のみの調査である。B区の周溝は全掘していないため推定ではあるが、墳丘側を基準として、直径約11mの円形を呈するであろう。溝の規模は一定ではなく、最大幅約3m、深さ約60cmである。遺物は、6世紀後半から7世紀前半頃の甕、壺、蓋、坏、高坏、提瓶、甗、甗等、大半の器種が出土しており、完形品は提瓶の数点を除き、ほとんどが破片である。その他にフイゴの羽口、鉄滓、凝灰岩も出土している。これらは、集落跡と古墳の時期的な問題もあるが、祭祀的なものとみるか単なる廃棄とみるかは今後の課題であ

る。主体部は調査区外のため不明である。F区で検出した周溝は、全掘していないため推定ではあるが、墳丘側を基準として直径約12mの円形を呈するであろうか。しかしながら、周溝は南西から北東にかけて弓なりに巡ってはいるが、北東部で東方に突き出しているため、古墳の形態は一概に円墳とは言い切れないように思われる。周溝からの遺物出土状況はB区のそれとは様相を異にしており、遺物量は少量であり、円筒埴輪片が出土している。主体部は近接するJR線路により削平されていると思われる。C区とD区は谷部にあたるため、他の調査区に比べて、遺構・遺物ともに希薄である。

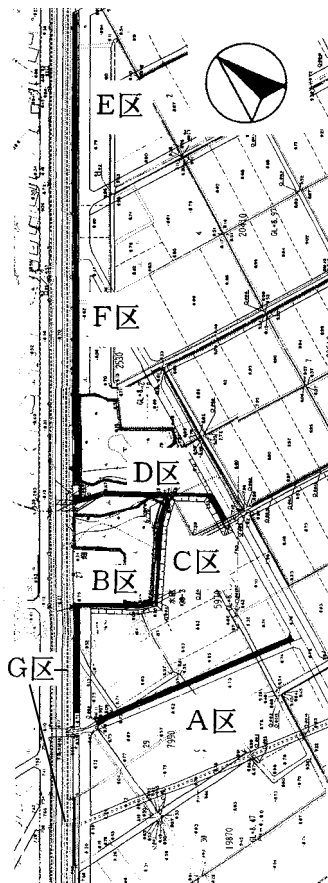
以上、周辺の遺跡分布状況なども考慮にいと、谷の両脇に古墳が点在し、その周囲に集落域が展開するのであろう。
(宮川勝次)



竪穴住居内部 土器出土状況 (G区)



掘立柱建物 (A区)



調査区位置図 (S = 1 / 5 000)



周溝内部 土器出土状況 (B区)

平成14（2002）年度上半期の遺物整理作業

企画部整理課

1 班

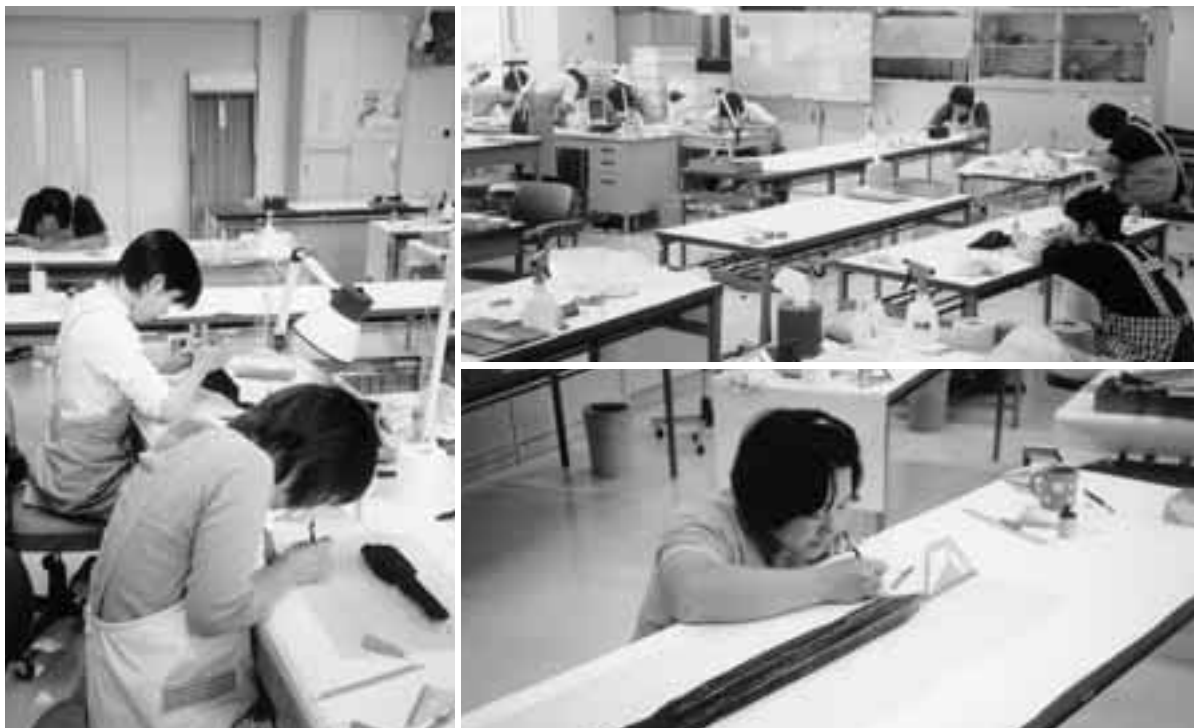
小松市八幡遺跡（1993～1994年度調査）では、実測・トレースを行った。次に鹿島郡鹿島町久江サザミヤシキ遺跡（1987～1988年度調査）坪川遺跡（2000年度調査）の記名から遺構図トレースまでをそれぞれ行い、続いて金沢市金沢城跡宮守城（1998・2000年度調査）では瓦を中心に分類から実測・トレースを行った。丸瓦の凹面には独特の調整痕があり、湾曲している為拓本にしわが出来てしまい納得するまで何度も挑戦した。また、建築部材では4m74cmの梁があり、四角がきれいに面取りされている。人力では動かせずクレーンを使用し荷捌室で実測をした。「金沢城」をより一層身近なものに感じる事ができた。

（北 寿栄）

2 班

小松市千代・能美遺跡（2000年度調査）の木製品の整理作業を行った。この遺跡の木製品には様々な種類のもが見られた。剣形・舟形木製品などの祭祀的なもの、ナスビ形の鍬15点、平鍬4点（うち3点が柄と泥よけを装着した状態のもの）、準構造船部材や櫂、建築部材、竪杵、梯子、田下駄、腰掛、組み物、火錐臼と火錐棒、弓や盾など数多くの木製品の選別、実測を行った。なかでも木製農具で三角形のすかしをもつナスビ形の鍬が数点、準構造船部材の竪板と舷側板が数点見られた。木製品には小型から大型のものがあり、後者には井戸杵があった。重要木製品も数多くあり、もろいものもあったので、取り扱いが大変であった。変わった加工がしてあるめずらしいものや、細かい細工のされたもの、昔の人達の技術などにも感心させられた。

（宮本巳恵）



3班

幸町遺跡（2001年度調査）では鉄滓と鞆の羽口が多数出土しており、それらを実測した後、鉄滓については地区ごとに重量を量った。だいじょうじ畑遺跡（2001年度調査）では、初めて五輪塔を実測した。重くて実測するのが大変だった。五輪塔は空輪、風輪、火輪、水輪、地輪で成り立っていて、そこに刻まれている梵字とともに宗教的な意味が濃いということを知った。徳丸遺跡（2000年度調査）では縄文土器などを、金丸宮地遺跡（2000年度調査）では弥生土器などをそれぞれ実測した。柏原ミツハシ・ジッチン遺跡（2000年度調査）では私は実測しなかったが、初めて絵画土器と皮袋型土器を見ることができた。上半期はいろいろな種類の遺物に触れることができて勉強になった。

（中村静絵）

4班

最初に矢田野遺跡（1999・2001年度調査）、刀何理遺跡（2000年度調査）、狐森塚古墳（2000年度調査）を行い、次に中屋遺跡（2001年度調査）、そして兵庫遺跡（2001年度調査）、栗生B遺跡（2001年度調査）の記名・分類・接合、土器・石器の実測・トレースをそれぞれ行った。現在は東の場タケノハナ遺跡（2001年度調査）の記名・分類・接合を終え土器の実測中である。遺物の中には祭祀具である分銅形土製品もいくつか見られる。その形や調整はかわいらしくさえ感じられ印象的である。昔の人はこれをどのように使用したのか大変興味深いものである。

（角間律子）

5班

穴口遺跡・穴口貝塚（2001年度調査）と次の吉田C遺跡（2000年度調査）では、記名・分類・接合、土器・木製品・石製品の実測・トレース、遺構図トレースを行った。畝田ナベタ遺跡（2001年度調査）は木製品・石製品・金属製品の実測・トレースを行った。次に金沢城跡（2000年度調査）鶴の丸は分類・接合、土器・瓦・金属製品の実測・トレース、遺構図トレースを、上半期最後の金沢城跡（1998年度調査）五十間長屋は、木製品・石製品・金属製品・金箔瓦の実測・トレース、遺構図トレースを行った。短期間に多くの遺跡に携わり、整理に苦労した遺物も多かったが、穴口遺跡の消火器形土器や五十間長屋の金箔シャチホコ瓦等、珍しく貴重な物にも触れる事ができたのはとても良い経験となった。

（片平雅恵）

6班

鵜島遺跡（2001年度調査）、吉田南側B遺跡（2001年度調査）、萩島遺跡（1999年度、2001年度調査）の出土品整理作業を完了し、現在は猫橋遺跡（2001年度調査）の記名・分類・接合の作業を行っている。鵜島遺跡からは、製塩土器が多数出土している。珍しく、完形に近い棒状脚尖底土器が多かった為、実測をする際に、細くて長い針マコを作製して実測を行った。また、底を打ち欠いて井戸枠に転用した珠洲焼きの甕が数点出土している。大きな甕であった為、内外面の拓本をとる際に四苦八苦した。

（河崎真帆）



7班

畝田・寺中遺跡（2000年度調査）の出土遺物の分類・接合及び、実測・トレースを2ヶ月間行った後、同遺跡（1999年度調査）の分類・接合作業に入った。ともに弥生時代中期から中世にわたる複合遺跡である。同遺跡（2000年度調査）分については古墳時代の甕・壺・器台・高坏・手づくね土器などの土師器や、坏・甕・鉢などの須恵器が中心で墨書土器も見られた。木器では木錘・弓・建築部材等、石器では砥石・磨製石斧・石鏃・硯等といった内容だった。同遺跡（1999年度調査）分の分類・接合作業では今のところ、ほぼ完形になるような甕や高坏などが数多く含まれている。パンケースで350箱余りという遺物の多さに見合った、時代的にも幅広くバラエティに富んだ出土状況のように思われる。
(海野美香子)

8班

金沢市戸水B遺跡（1999年度調査）の記名・分類・接合と実測。次に、戸水B遺跡（1997・1998年度調査）の記名・分類・接合まで行って、ここで一時中断し、一週間という短期間で、羽咋郡館郷堂遺跡（2000年度調査）の記名・分類・接合及び実測・トレースを行った。その後、再び戸水B遺跡に戻り、石器、木器の実測・トレースを行った。中でも穀類を刈り取る為の道具、横刃形石器が出土しており、使用の痕跡（コーングロス）を見る事が出来た。また、この遺跡では、全国的にも珍しい石製の指輪や、底部にコブ状の突起を有する木製高坏などの特異な遺物に触れることが出来た。
(北 香織)

洗浄班

上半期は3ヵ月間パートさん3人加えて、戸水B遺跡（1999年度調査）吉田南側B遺跡（2001年度調査）柏原A遺跡（2001年度調査）館開野開遺跡（2001年度調査）畝田寺中遺跡・畝田遺跡・畝田大徳川遺跡（2001・2002年度調査）の洗浄・乾燥をした。箱数は合計で355箱になった。その中でも大変だったのは館開野開遺跡での多量の鉄滓の洗浄だった。ブラシをタワシと竹串に持ち替えて小さい穴に詰まった土を丁寧に取り除いた。遺物の洗浄は素手でする方が良いので指先はボロボロになったがキズテープを巻きながら洗った。又6月と7月には、中学生と高校生の職場体験があり土器の洗浄や後かたづけに熱心に取り組んでくれた。短時間だったが生徒さんが心に何かしら残る体験であれば願っている。
(末富しげ子)

復元班

土器の完形度がほぼ100%で出土した穴口遺跡。把手付壺に特色のある東的場遺跡。須恵器が多数出土した鷯島遺跡等の遺物が集中している修復作業室には、個性感のある土器が置いてある。中には「金沢城」から出土した「土管」もある。技術進化が進んでいる現代において、先人達が残した遺産には、頭の下がる思いがある。バラバラに出土した破片を1つ1つ接合しながら、やがて元の形になった土器は、古代人達が大切にしていたものとして永久に展示室や収蔵庫等に収めているのである。(小間博文)



弥生時代における影響関係について

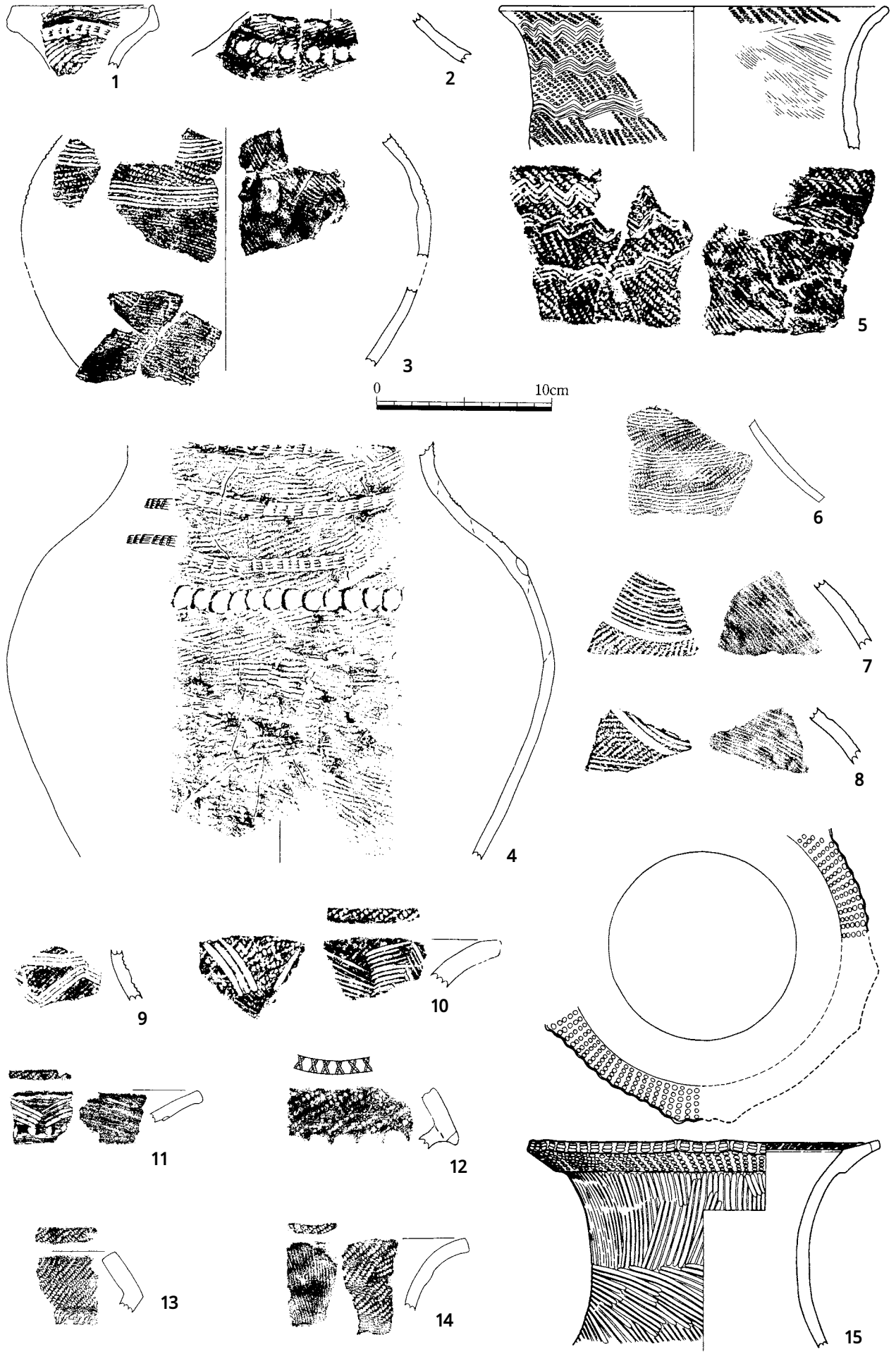
久田正弘

1. はじめに

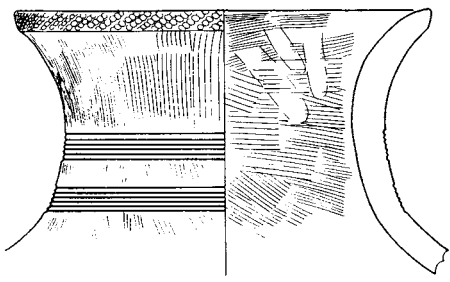
北陸地方西部の弥生土器は、西日本各地の影響のもとで独自の発達が見られる。弥生時代前期条痕文系土器群は、西日本・東海地方西部系土器群の影響を受けながら、北陸3県独自の土器群が存在している。その独自の土器群は、弥生時代中期になると 期では浮線文系浅鉢群が消滅し、 期では条痕文系土器群の消滅が認められる。その過程における土器群間の影響関係を石川県の事例から紹介したい。また西日本系の土器群などについても、新資料を紹介したい。

2. 条痕文と櫛描文の関係

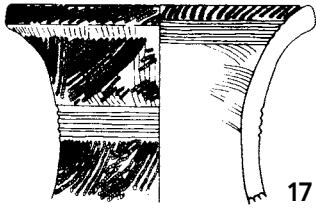
条痕文系土器と櫛描文系土器の影響関係を窺える資料は、北陸3県では福井・富山県では資料が少ないために不明であるが、福井県でも存在したような記憶があり、未報告資料の公表や資料の蓄積を待ちたい。石川県では能登～南加賀地方まで出土しているが、小松市八日市地方遺跡の土器はまだ未公表なので、詳細は不明であり、北加賀地方以北の状況で論じてみたい。第1図1～5は山王丸山遺跡出土である(的場ほか1994)。1は条痕文壺であるが、地文に燃糸を持つ。2・4も条痕文壺であり、指頭による刺突文を持つが、地文に燃糸を持つ。4は太頸の壺であり、円形で中空の工具を束ねた櫛による簾状文を持つ。3は櫛描文壺であり、内外面下半は細いハケ、内面上半はやや粗いハケ調整である。櫛描文の間に縄文を充填する。5は条痕文壺であるが、口縁部内面と外面は縄文を施文し、櫛による山形文を持つ。6は富来町高田遺跡出土(橋本ほか1999)の櫛描文壺であり、櫛描直線文を単体構成で施文し、櫛描文の間に縄文を充填する。高田遺跡出土土器などの縄文施文は、「東西両文化圏交流点として土器製作上の技法においても混交が著しい」例とされている(橋本1975)。7～16は羽咋市吉崎・次場遺跡出土である(福島ほか1987)。15はN-2号土坑出土であり、遠賀川式系土器と櫛描文系土器と条痕系土器群が出土し、 期前半である。太頸の条痕文壺であるが、口縁部を内外に肥厚させており、5ないし6単位の波頂部であり、波頂部に凹を持つ。この土器は口縁形態(内面肥厚、多角形口縁、波頂部形状)が大地型壺(江崎1956・紅村1979)の特徴を持っている。7～14はW区包含層出土である。7・8は同一個体(一部改変)であり、内面は粗いハケ調整の櫛描文壺である。外面は粗いヨコハケ調整後に断面円形の沈線で円形文を描き、その内側を櫛で円形文を描いており、文様施文後に縄文を充填する。8は円形文の下側に櫛描直線文があるようである。円形文は阿島・須和田式系の文様と判断していたが、渦巻文土器(神村1988)の系譜を引いた文様と判断したほうが妥当であろう。よって、櫛描文壺に渦巻文壺(円形文)と大地型壺(縄文)との特徴を持っており、総称して沈線文壺(服部1992・永井1994)の影響を持った土器ある。この土器の類例は小松市八日市地方遺跡で出土しているが、櫛描文系壺であるかは検討を要するようである(福海氏教示)。9は内面がナデ調整であり、厳密には条痕・櫛描文系のどちらの壺であるかはやや判断に苦しむ土器である。山形文は山王丸山遺跡では、条痕文壺と甕(5)に多く認められるが、櫛描文壺でも存在する。9は直線文と山形文が組み合わされており、櫛描文壺の可能性が高いか。この土器は櫛か条痕(櫛描文・条痕文壺)による文様と縄文が組み合わされる。10は条痕文壺の口縁部と思われ、縦羽状条痕を持ち、口縁部内面と口唇部に縄文を持つ。口縁部内面には外面の羽状条痕より太い幅の工具による文様を持つ。11も条痕文壺であり、外面を低い貼付突帯により肥厚させる。突帯には山形文を施文し、下端には刻みを持ち、口唇部に縄文を持つ。12は櫛描文壺であり、第52図391(福島ほか1987)であり、一部改変した。受口部下半と内面はハケ調整であり、



第1図 条痕文と櫛描文の関係土器 1



16



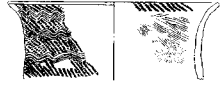


17

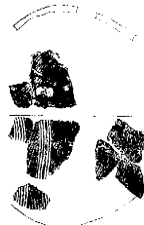
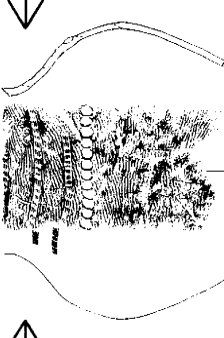


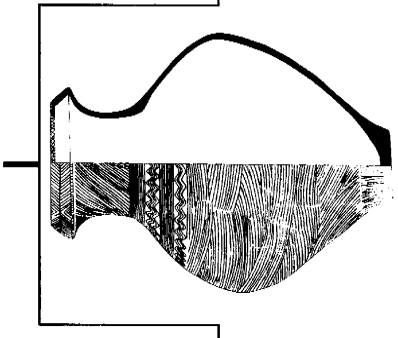



18

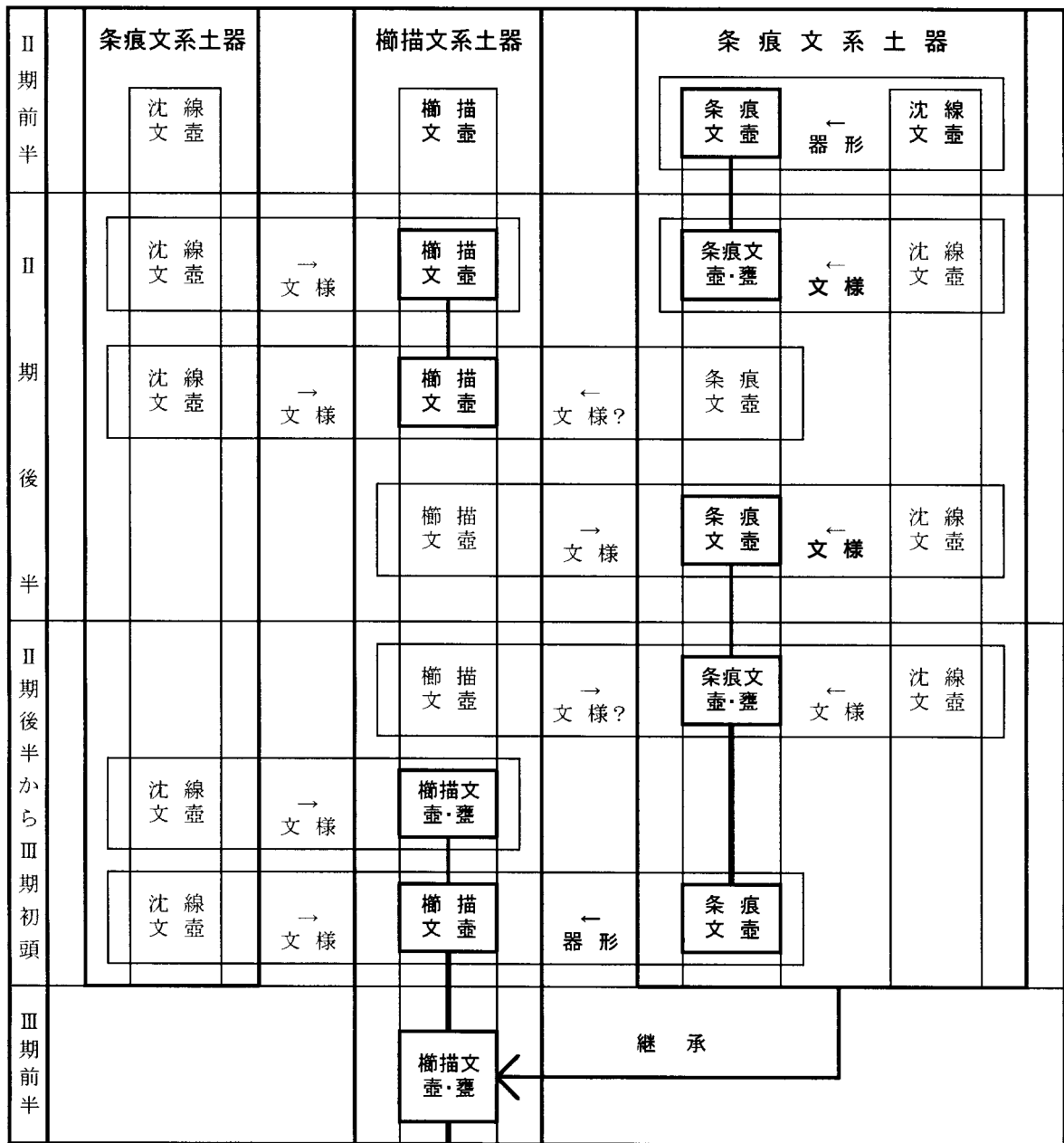
第2図 条痕文と櫛描文の関係土器2

	櫛 描 文 甕	沈 線 文 壺	条 痕 文 甕
Ⅱ 期 前 半	主 流	主 流	主 流
Ⅱ 期 後 半		文 様	
Ⅱ 期 後 半 从 Ⅲ 期 初 頭	 文 様 文 様(山形文)?	文 様	
Ⅲ 期 前 半			(1/8)

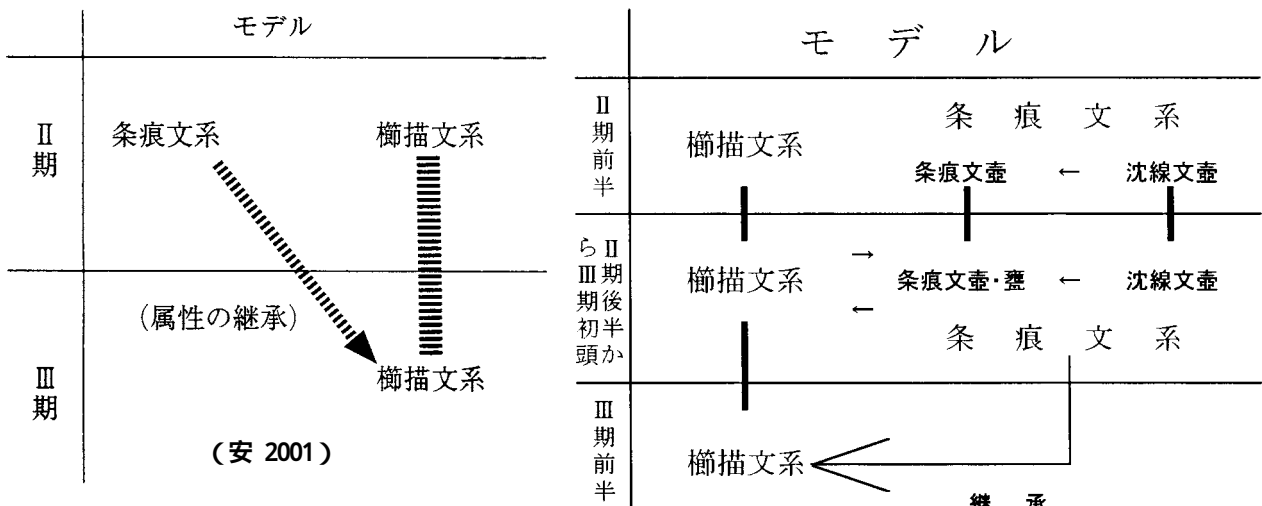
第3図 影響関係図1

	沈線文壺	櫛	文壺	壺	條痕文壺	壺	沈線文壺
II 期前半	主流			主流	主流	器	主流
II 期後半	文	 文 様	文 様 口縁部内直線文?	 器 形	文 様 文 様	 文 様	文 様 文 様
II 期後半から III 期初頭		文 様 文 様		 (1/10)			
III 期前半	文	 文 様					他は(1/8)

第4図 彩繪要図2



第5図 影響関係図3



第6図 装飾的属性などの変化・継承モデル案

口唇部の刻みも八ケのようである。受口部外面には縄文を持つ。13も櫛描文系の受口壺であり、口縁部と口唇部に縄文を持つ。よって、12・13は櫛描文壺であるが、条痕文壺の口縁形態(器形)を持ち、口縁部に沈線文壺の文様を持つ。14は櫛描文壺であり、口縁部内面と口唇部に縄文を持つ。16はV5号溝出土の太頸の櫛描文壺であり、櫛描文は単体構成であり、口唇部に縄文を持つ。第2図17・18は金沢市矢木ジワリ遺跡出土である(増山1987)。17は櫛描文壺であるが、八ケ調整のち外面と口縁部内面に縄文を充填する。また、口縁部内面には櫛による直線文を巡らせており、受口状口縁を持つ条痕文壺の口縁部内面文様と共通する。18は条痕文深鉢であり、条痕調整であるが胴部上半まで縄文を持つ。

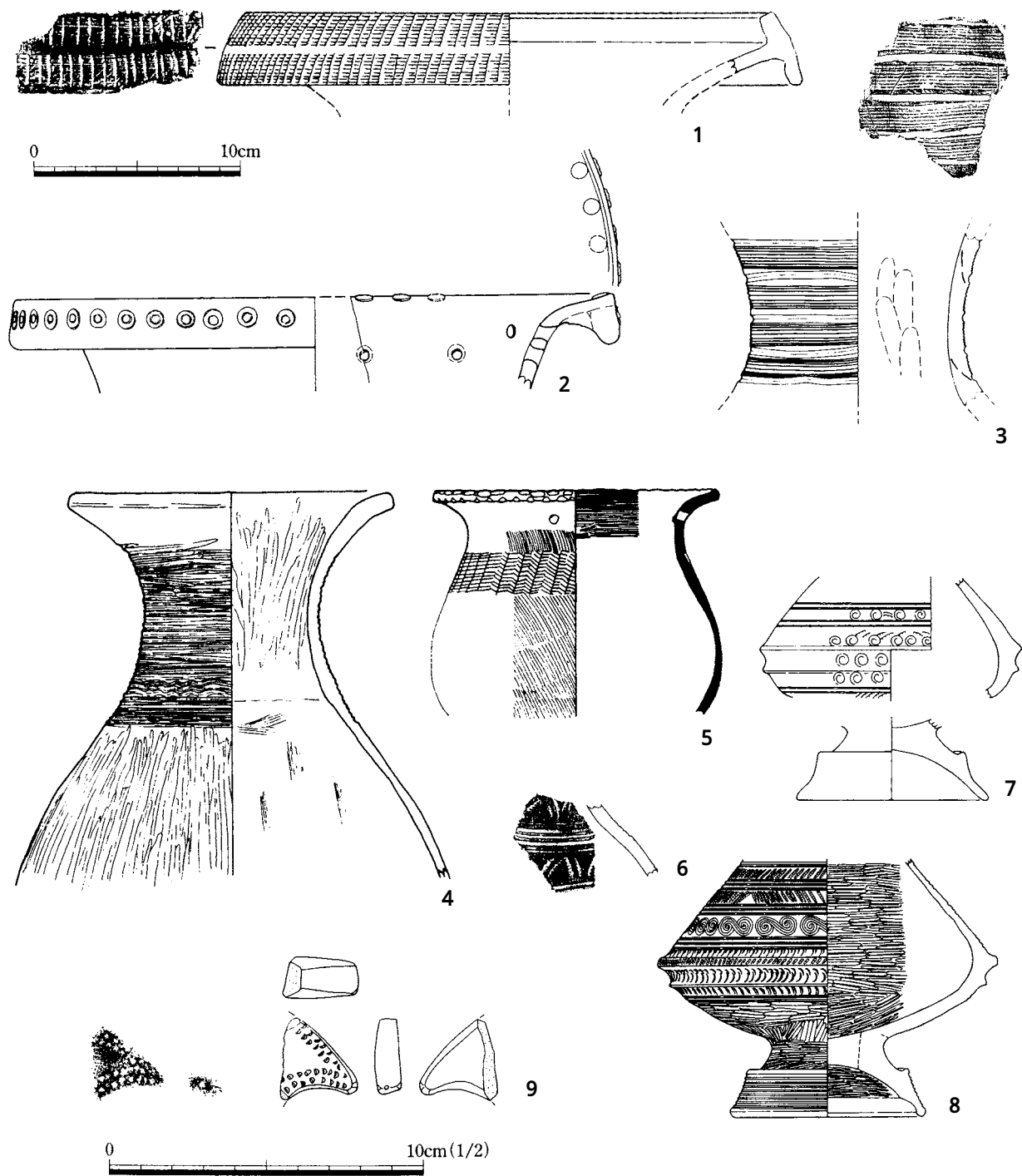
第1・2図の土器はおおむね 期後半から 期前半(1)(的場・久田ほか1994)であるが、包含層資料が多いために、明確な時期は確定できないものが多い。16は増山編年3期の基準資料(増山1989)であるが、櫛描文が単体構成であることや縄文を持つことからやや古相と思われる。期前半は吉崎・次場遺跡N-2号土坑を基準とし、期後半は山王丸山遺跡包含層、吉崎・次場遺跡J・W区包含層、矢木ジワリ遺跡などを基準とする。期後半～期初頭は山王丸山遺跡包含層、吉崎・次場遺跡J・W区包含層・V-5号溝、下安原遺跡101号溝を基準とし、八日市地方遺跡5・6期に併行するものと考えている。期前半は、吉崎・次場遺跡V-5号土坑、金沢市寺中遺跡周溝を持つ建物(宮本1977)などを基準とし、期前半は斜行単線文が一部に存在することから、従来の期前半の中でもやや新しい可能性(八日市地方遺跡7期併行)が指摘できるものと思われる。上記の関係を時期と系統で分類すると第3・4図となる。壺は各系統とも主流が存在するが、条痕文系土器群の壺において、期前半に粗製壺(条痕文壺)に精製壺(沈線文壺)の器形が採用(第1図15)され、期後半には条痕文壺に文様の採用(縄文)が認められる。沈線文壺文様の採用は、櫛描文壺(3)でも同時期に認められる。また4は縄文と簾状文を持つので、条痕文壺に沈線文・櫛描文壺の文様が採用されている。17は櫛描文壺に沈線文壺の文様が採用され、その上に条痕文壺の文様も採用された可能性がある。これらの他系統壺文様の採用は、条痕文系土器群の消滅により確認されなくなる。

12・13は沈線文壺の文様を採用した櫛描文壺であるが、器形は条痕文壺の口縁形態を採用している。受口状口縁を持つ櫛描文壺は、八日市地方遺跡では 期後半で出現(福海氏教示)しているようであり、能登地方でも同時期に出現した可能性もあるが、現在能登地方の資料では 期後半～期初頭としか判断できない。この受口状口縁壺は、期になると北陸地方の主要壺となり、条痕文壺の太頸も継承しており、太頸は受口状口縁を持たない櫛描文壺にも継承されるようである。口縁部文様は、八ケによる綾杉文であり、期後半のヘラによる綾杉文(条痕文壺の文様)を継承している(安2001)。

今回の問題については、期に条痕文系土器と沈線文系土器との間で装飾性の一体化が進み、期には櫛描文系土器に条痕系の器形・文様の属性が継承(第6図左)されるという独自の動き=「北陸型」が既に提唱されている(安2000・2001)。基本的には筆者も同じであるが、期前半に条痕文系土器群において条痕文壺に沈線文壺の文様が採用=壺における文様規範の一部崩壊が始まり、期後半には文様規範崩壊が、条痕文系壺群間のみならず、異系統である櫛描文壺との間でも一部行われ、この影響は別器種の甕にまで及んでいる。この同一系統内での文様施文規範の一部崩壊(融合化)が、異系統土器群の枠を超えた結果(第5図)、期の櫛描文系土器に条痕系土器の器形・文様の属性への継承(安2000・2001)が容易になされたものと判断する(第6図)。

3. 生駒西麓産の土器の紹介

最近になり、北陸地方でもいわゆる生駒西麓産土器が若干ではあるが確認され始めたので紹介を行う。第7図1は、富山県氷見市大境洞窟第5層出土の 期後半(凹線文出現期)の壺であり、色調は



第7図 西日本との関連遺物

黒褐色であることや器形や文様からも大阪府東部地域（上野ほか2002）であろう。河内 1・2 様式（寺沢ほか1989）に併行すると思われる。2は、羽咋市吉崎・次場遺跡 W4 区出土である。実測番号86404で報告書に掲載されなかった資料である。原図を一部改変し、ここに掲載した。色調は褐色であり、非常に多くの角閃石を含む生駒西麓産土器である。復元口径28.6cmの壺であり、外面は横ミガキ調整であるが、口縁部の外反する部分がやや荒れている。口唇部に円形浮文を持ち、半截竹管で円文を施文する。円文内には赤彩痕が見られるので、全体に赤彩されていた可能性がある。内面には2個の円形浮文が存在し、1個の剥離痕が明瞭に存在する。円形浮文は本来内側全部に存在した可能性がある。大きく開く口縁部の外側に粘土を貼り付けて拡張する。補強のために内側に粘土を貼り付けて指頭によるオサエを右回りで行う。外面には3箇所の補修孔があり、共に内外面から穿孔されている。一番左側は内側に貫通する部分以外に3箇所の穿孔痕が残っている。河内 0・1 様式に併行するものと思われる。また、吉崎・次場遺跡には、胎土的には生駒西麓産ではないが 期前半の N-2 号土坑で和泉 0 様式に特徴的に見られる「付加条を持つ櫛描き直線文」（樋口1990）を持つ壺（第7図3）が出土している。8条の櫛で右周りに施文した後に断面円形の沈線を施文する。胎土は、赤・黒・灰・白色のチャートないし流紋岩が主体であり、石英や長石を少々含むが角が取れて丸くなっている。よって、石英・長石主体でないので、和泉地方や吉崎・次場遺跡で作られた可能性が低いと思われる。搬入にしてもチャート・流紋岩を主体とする地域からであり、吉崎・次場遺跡の遠賀川式土器と同様に滋賀県湖東地方から若狭地方にかけての地域（久田2001）と考えられる。

さて、大阪府寝屋川市高宮八丁遺跡遺跡では第 様式古相の土器と共に北陸系土器第7図4（若林ほか1992）が出土し、胎土的に近畿地方のものではなく（久田1999）、福井平野で製作された可能性が高い。東大阪市瓜生堂遺跡（今村ほか1981）では河内 2 様式に搬入された壺（第7図5）は、南信濃地方の恒川式の影響（寺沢ほか1989）よりも北陸地方からの搬入と考えたい。よって、北陸地方の土器が大阪湾周辺に搬入され、また北陸地方にも生駒西麓産土器などの搬入を前提として、土器の観察や抽出を行う必要がある。しかし、個体数はあまり多くは無いと想定できそうである。

4. タマキ貝文様の紹介

6は吉崎・次場遺跡83年 V 5 溝覆土（黒粘）出土土器である。壺の胴部上半部分であり、縦ハケ後文様を施した後に、横方向の軽いナデを入れる。二枚貝による貝殻腹縁文を2つセットで、櫛描文の間に山形状に施文する。腹縁の外側に凹凸が見られないので、タマキ貝の可能性があろう。タマキ貝文様は、山陰地方の遠賀川式土器や後期の装飾壺に類例があり、後者は野々市町押野タチナカ遺跡（横山ほか1989）で7・8や小松市平面梯川遺跡で出土している。6の出土遺構は 期末～ 期初頭であり、直接的な系譜は引けないがタマキ貝腹縁文の使用は、山陰地方との交流の結果であろうか。

5. 分銅形土製品の紹介

石川県では分銅形土製品の出土例も多く、現在能登地方では羽咋市吉崎次場遺跡4点、東的場タケノハナ遺跡3点、北加賀地方では金沢市戸水 B 遺跡4点、藤江 C 遺跡1点、松任市横江古屋敷遺跡1点、南加賀地方では小松市八日市地方遺跡10点、大長野遺跡1点、加賀市猫橋遺跡3点を確認している（未報告分を含む）。第7図9は羽咋市吉崎次場遺跡84年調査 W8 区出土であり、3点報告された同じ調査（福島ほか1988）で出土したものである。細い竹管か茎による刺突を2列施文する頭部の破片である。下側の刺突文は右上から、頭部上側に刺突文は右下から行われている。頭部角には中央部には同じ竹管による刺突か石が剥離したのか判断に苦しむが、浅い穴が存在する。表面はくすんだ灰白色であり、裏面は灰色である。先端側は厚さ9mmであり、破面側は12mmであり、中央部が少し厚くなっている。胎土は黒・白色チャートを多く含み、石英（クリスタル）を長石も含んでおり、搬入

の可能性もあるが、破片が小さいので限定するのは難しい。吉崎次場遺跡の土器の大部分は、石英・長石主体であり、他の3個体も混和材的には石英・長石主体であるので、現状では他地域からの搬入品の可能性を積極的に論じる事は出来ない(久田1996)のが現状である。

6. おわりに

今回は、期前半において、規範の一部崩壊から始まった条痕文系土器群内での変化が、やがて櫛描文系土器群にも影響が及んだことを明らかにした。この異系統土器間の影響関係は、条痕文系土器群の消滅を促す要因の一つとなり、また条痕文系土器の属性が容易に櫛描文系土器に継承(安2001)される下地を作ったと思われる。しかし、条痕文系土器群の変化(規範の崩壊)は、西日本を中心とした櫛描文系土器群の影響によって発生したものと考えている。また時期は違うが、西日本との関係を考える上で重要な未報告資料の紹介を行った。今後、各方面からの御教示・批判・指導などを頂きたい。なお赤澤徳明・伊藤雅文・上野章・田崎博之・林大智・福海貴子・松尾実・安英樹・湯尻修平・横山貴広・吉田淳氏から、教示や資料提供を受けたことを感謝いたします。

参考文献

- 今村道雄・曾我恭子編 1981 『瓜生堂遺跡』 瓜生堂遺跡調査会
- 上野 章・大野 研 2002 「大境洞窟遺跡出土遺物(2)弥生土器」『氷見市史 7 資料編五考古』 氷見市
- 江崎 武 1965 「所謂大地式土器の再検討」『いちのみや考古 No6』 一宮考古学会
- 神村 透 1988 「浮線渦巻文土器」『条痕文系土器文化をめぐる諸問題 資料編・研究編』愛知考古学談話会
- 紅村 弘・増子康真ほか 1979 『東海先史文化の諸問題(資料編)』
- 寺沢 薫・森井貞雄 1989 「河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編』 木耳社
- 永井宏幸 1994 「沈線紋系土器について」『朝日遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 橋本澄夫 1975 「弥生土器 中部 北陸2」『考古学ジャーナル107号』ニュー・サイエンス社
- 橋本澄夫ほか 1999 『高田遺跡』 富来町教育委員会
- 服部信博ほか 1992 『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 久田正弘 1996 「北陸地方と他地域の関係1」『YAY!』弥生土器を語る会
- 久田正弘 1999 「弥生時代中期の北陸と長野の関係」『長野県考古学会誌 第92号』 長野県考古学会
- 久田正弘 2001 「北陸地方の木目沈線文と遠賀川式土器について」『石川県埋蔵文化財情報 第6号』石川県埋蔵文化財センター
- 樋口吉文 1990 「和泉地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編』 木耳社
- 福島正実ほか 1987 『吉崎・次場遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 福島正実ほか 1988 『吉崎・次場遺跡(2)』 石川県立埋蔵文化財センター
- 増山 仁 1987 『金沢市矢木ジワリ遺跡 矢木ヒガシウラ遺跡』 金沢市教育委員会
- 増山 仁 1989 「小松式土器の再検討」『北陸の考古学』石川考古学研究会
- 的場勝俊・久田正弘ほか 1994 『山王丸山遺跡』富来町教育委員会
- 宮本哲郎 1977 『金沢市寺中遺跡』 金沢市教育委員会
- 安 英樹 2000 「北加賀における弥生時代中期前半の土器編年と変遷過程」『中部弥生時代研究会会誌第1号』 中部弥生時代研究会
- 安 英樹 2001 「北加賀における弥生時代中期前半の土器編年と変遷過程」『考古学フォーラム13』 考古学フォーラム
- 若林邦彦・濱田延充ほか 1992 『高宮八丁遺跡』寝屋川市教育委員会
- 横山貴広ほか 1989 『押野タチナカ遺跡 押野大塚遺跡』 野々市町教育委員会

第4回石川の発掘展「七尾湾の縄文世界」の記録

小嶋芳孝

平成14(2002)年8月1日(木)～8月31日(土)にかけて、第4回石川の発掘展「七尾湾の縄文世界」を当センターの研修室を会場に開催しました。今回の展示は、平成6(1994)年から平成12(2000)年にかけて実施した田鶴浜町三引遺跡の発掘調査成果をもとに、七尾湾周辺を舞台とした縄文時代前期初頭の様相を紹介することを目的に企画しました。展示にあたっては、穴水町教育委員会、金沢市教育委員会、福井県金津町教育委員会、藤田富士夫氏から資料を借用するとともに、多くの助言や教示をいただきました。



展示の概要 縄文時代前期初頭(約6000年前)には、現在よりも気温が2～3度暖かく、海面も3mほど上昇したと考えられています。これにより海岸線が陸地側深くに入り込み、海岸部では魚介類の宝庫となる遠浅の内湾が各地で形成されました。この頃になると人々の関心は海の幸に向けたようで、日本列島だけでなくロシア沿海地方や朝鮮半島など日本海に臨む各地の海岸部で貝塚を伴う集落が営まれています。



七尾湾でも三引遺跡をはじめとして縄文集落が海岸部に進出しており、海を舞台に活発な活動を展開していた縄文人たちの様子が窺われます。七尾湾周辺では、約130ヶ所の縄文時代の遺跡が見つかっています。その中で、早期後半から遺跡が出現し、前期初頭(約6000年前)になると、入り江の奥など海岸の近くで14ヶ所の遺跡が確認されています。三引遺跡や甲小寺遺跡、佐波遺跡、通ジゾハナ遺跡の発掘調査により、縄文時代前期初頭から、海で貝や魚、イルカなどを捕ることが普及し、多くの人々が海岸近くに住むようになったことがわかってきました。

三引遺跡の貝塚 三引遺跡の発掘調査では貝塚が発見され、人々が食べた動物や魚の骨、貝、土器、石器などが出土し、当時の生活が明らかになりました。

縄文人は周辺の自然の中から様々な動植物を獲得し、食料として利用していました。貝塚を調査すると、彼らが食料とした動物の骨や貝、木の実などがたくさん見つかります。これらを詳しく調べることにより、当時の縄文人たちの食料事情を明らかにすることができます。三引遺跡でも海や山で採った貝や木の実のほか、魚やシカ、イノシシなど様々な動植物を食料としていたことがわかりました。

三引遺跡の装身具 三引遺跡では、貝塚から約60点の石製装身具が出土しています。球状耳飾や有孔

円盤には製作途中の資料もあり、貝塚の周辺で石製品が作られていたようです。有孔円盤はロシア沿海地方のチェルトヴィ・ヴォロタ遺跡で出土していますが、国内では初の事例です。三引遺跡の石製装身具は、玦状耳飾などの玉文化が日本列島に伝わった経路を考える上で重要な資料です。

富山県上市町極楽寺遺跡は縄文時代前期初頭の集落跡で、未製品を含む多量の玦状耳飾が採集され、縄文時代の耳飾製作遺跡として知られています。極楽寺遺跡の採集品が中国江南にある約6000年前の遺跡から出土する玦状耳飾と似ていることから、藤田富士夫氏は江南の玉製装身具の文化が縄文前期初頭の富山湾沿岸地域に影響を与えたという説を提唱しています。

福井県金津町桑野東遺跡では縄文時代前期初頭の墓地が発掘され、白色の石を用いた大型の玦状耳飾やヘラ状石製品が多数副葬されていました。この石材が日本では見られないことから、桑野東遺跡の装身具の製作地をめぐる大陸説や国産説など議論を呼んでいます。



玦状耳飾（桑野東遺跡）の展示



三引遺跡の貝塚ジオラマ



展示室の全景

加茂遺跡における弥生時代の水田跡の紹介

松尾 実

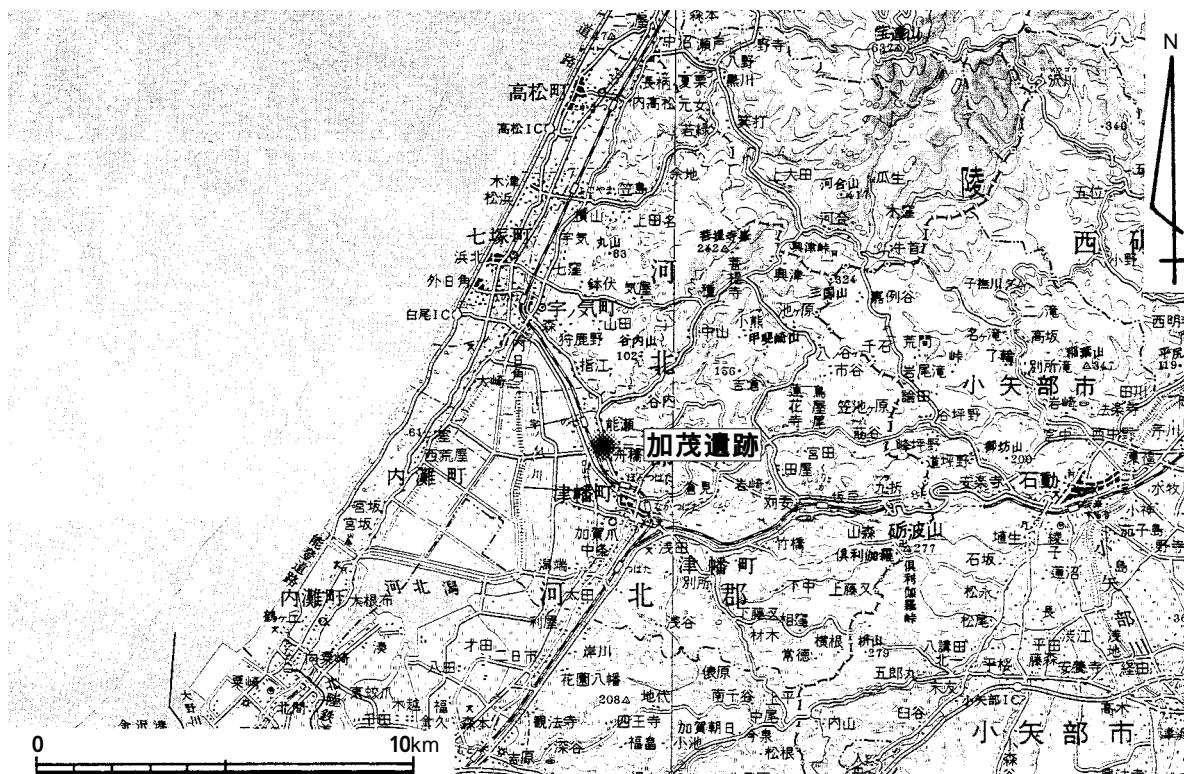


図1 遺跡位置図

はじめに

今年度、津幡町所在の加茂遺跡第8次調査において、B区第4面で弥生時代の水田跡を検出した。北陸地方（注1）における当該期の水田遺構は例が少なく、弥生時代研究の一端を担う具体的な資料の一つとして将来重要性を増すと考える。整理作業中であるが、当該遺跡の水田跡の紹介を目的として、報告する。

地理的・歴史的環境

宝達山を主峰とする宝達山系の南に位置する津幡・森本丘陵西麓には、数々の谷が入り込み、複雑な地形をなす。また、それらから派生する中小河川は河北潟に注ぎ込み、沖積地を形成している。加茂遺跡周辺は東側の丘陵より派生する舟橋川によって形成された三角州上（注2）に立地する（図1）。

弥生時代における当該遺跡周辺には領家遺跡、谷内石山遺跡、能瀬遺跡、庄住吉神社遺跡、加茂A遺跡を数えるが、具体的な様相は解明されていない。一方、加茂遺跡では第5・6・7次調査で弥生時代中期の建物跡等、後期の建物跡等が確認されている。今後、これら居住域と生産域の関連性、環境復元、動態が研究されれば、より具体像が浮かび上がると考える。

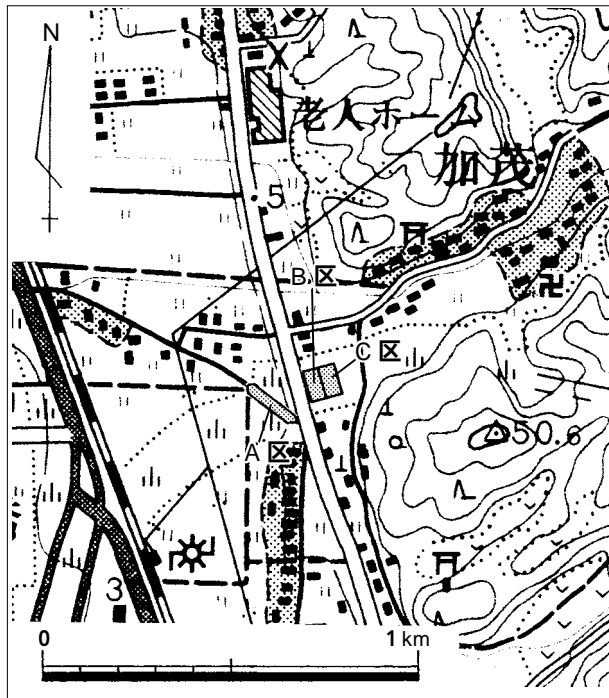


図2 調査位置図

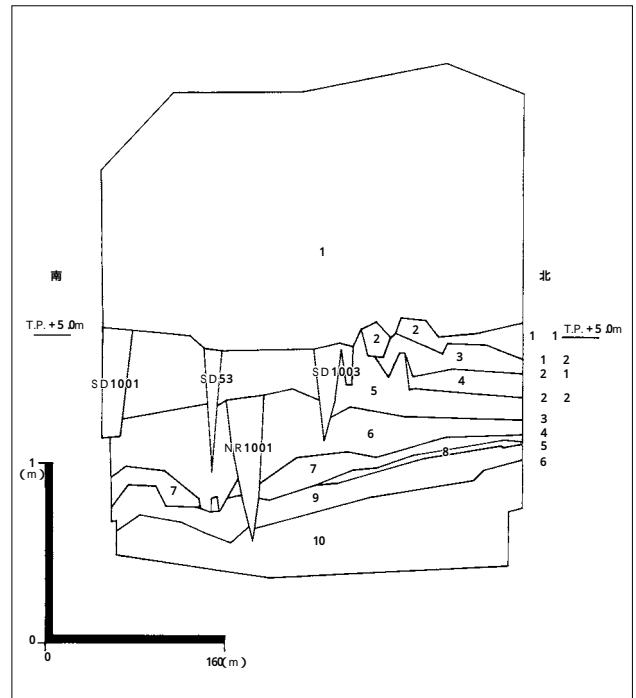


図3 B区西壁断面模式図

調査成果概要

調査区は西から順にA、B、C区と設定した。(図2)今年度の主な調査成果としては、古代では建物群、北陸道の一部(道路側溝)、大溝と他方から流れ込む溝の合流地点、地震痕跡(砂脈)等がある。古墳時代では流路等を確認した。弥生時代では建物跡や礎板を多数検出している。

当報告を行うB区は平成13年度の第6次で第1面を調査しており、今年度はそれより下層の調査を行った。検出面は2面から6面までで、部分的に調査した面も含め、合計8面を調査している。また、縄文時代の包含層の有無を確認するべく下層確認トレンチを設定・調査(注3)した結果、縄文時代後期～晩期の包含層を認めた。

水田面はB区第4面で検出している。B区4層(図3の7)の相当層は、A区でも確認できるが、畦畔は認められなかった。C区は1面のみの調査で終了したため、それより下層は来年度以降の調査となる。

基本層序

- 1(0層) 表土である。耕作土として連綿と堆積している。古代以降の遺物の破片を含む。
- 2(1-1層) 灰色(5Y5/1)粘土～浅黄色(2.5Y7/3)シルトである。調査区北側半分に堆積している。時期は古代に属する。
- 3(1-2層) 浅黄色(2.5Y7/4)シルト混じり粘土～黒褐色(10YR3/1)粘土混じりシルトである。調査区北側半分に堆積している。時期は古代である。
- 4(2-1層) 灰色(N6/0)粘土である。炭、土器片を多く含む。調査区北側半分に堆積している。時期は古代である。
- 5(2-2層) 灰色(5Y5/1)シルト混じり粘土～灰色(5Y6/1)シルト混じり細砂である。下部には厚さ3cm～5cmの炭粒層がめぐり、調査区全体に認められる。調査区南側は標高

- が高く、南側では低くなる。時期は古墳時代頃である。
- 6 (3層) 黄灰色 (2 5Y5/1) シルト~黄灰色 (2 5Y5/1) 細砂混じりシルトである。南側になると、植物遺体を多く含む青灰色 (5 B6/1) シルトの堆積層があり、下部ではラミナが随所に見られる。洪水砂と考える。調査区南側で標高が高く、北側では低くなる。時期は弥生時代中期~古墳時代に相当する。
- 7 (4層) 褐灰色 (5 YR5/1) シルト混じり粘土である。土器片は含まれない。堆積層は、北側では薄く、南側に向かって厚くなる。時期は弥生時代中期頃と考える。
- 8 灰白色 (2 5Y7/1) 微砂である。調査区北半分に堆積している。間層として捉えることができる。南半分では当該層は見られなくなる。
- 9 (5層) 黒褐色 (2 5Y3/1) 粘土である。層厚約20cmで汎的に堆積している。北側から南側に向かって標高が低くなっていく。弥生土器片や石器を多く含む。時期は弥生時代中期頃に相当する。
- 10 (6層) 明青灰色 (5 BG7/1) 粘土~灰色 (N6/0) 粘土である。北側から南側に向かって標高が低くなっていく。時期は弥生時代中期以前と考える。

調査成果の概要 - 第4面 -

調査区南壁断面の土層観察で3層の下部にラミナの堆積と畦畔状の高まりが確認できたので、平面での検出作業を行った。標高は、T.P. +4.2m~T.P. +4.7mである。

調査区北半分は、第4面のベースである4層が薄く、3層を除去すると5層が見える個所や、掘り過ぎた個所があるので、畦畔を検出できなかった。また、北東から南西方向と南東から北西方向の水流痕跡を2条検出した。埋土は植物遺体(トチ類などの落葉樹)を含む。水流痕跡は畦畔を切っていることが認められるので、水田を造成した後にできたと推定できる。

調査区南半分では、西側に広い範囲で落ち込みがあり、植物遺体(トチ類などの落葉樹)が集中している個所があった。東側は微高地であり、そこから畦畔を検出している。畦畔の幅約45cm、高さ約5cmを計る。整然と区画されたものではなく、自然の傾斜に即して区画されている。足跡等は田面になかった。面積は田面1で約8㎡、田面2で約27㎡となる。自然地形に即した小区画の水田といえる。また、調査区南端では、東から西方向の水流痕跡が畦畔を切る形で検出できた(図4)。

4面では、造成された水田の畦畔等が洪水によって削り取られた後、自然流路ができたと推定する。

時期

2層上面で検出したSD1001、SD53、SD1003等の時期は、古墳時代前期~古代に相当する。第3面で検出したNR1001では、弥生時代中期後半~後期の土器群が出土している。第4面検出のSD1011、SD1012は、弥生時代中期後半~後期前半の遺物が出土しているが、5層中の混入もあると考えられるので、慎重に期したい。5層は弥生時代中期後半頃の土器等を多く包含している。

よって、第4層の時期を弥生時代中期後半~後期前半の範疇で捉えたい。私見では水田の時期を弥生時代中期後半頃と想定する。整理作業が進めば、より具体的な年代が推定できよう。

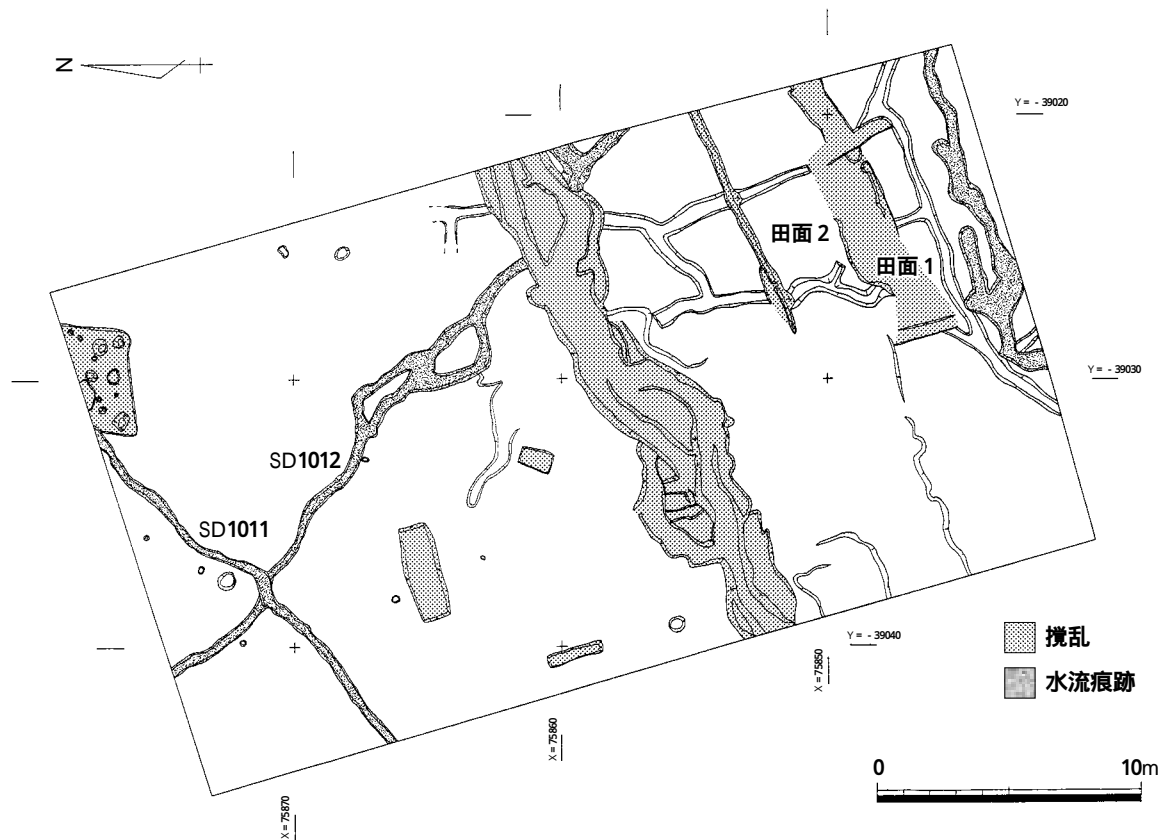


図4 B区第4面平面図

まとめ

当該調査において、弥生時代中期後半～後期前半の水田跡を検出した。小区画の水田は微高地上に立地しており、自然地形に即して畦畔が造成される。鳥瞰すると、当該遺跡は東方の谷から派生する自然河川によって形成された三角州上に立地しており、自然地形を利用して水田を営んでいたと推定する。近隣には集落の存在が想定でき、小共同体の生産域と考えられる。稲作農耕を具体的に示す水田跡の事例は北陸地方では多くない。将来、自然化学分析の結果や時期等の検討から、より具体的な様相を示して、弥生時代研究の進展に役立てたい。

おわりに

水田調査は、全国的に見ても調査技術の水準が年々高くなっており、調査時での問題意識や方法論も多岐に及んでいるのが現状であり、調査技術の向上を真摯に行わなければいけないと痛感している。弥生時代における畑作の調査事例（注4）もでており、問題意識をもって、なお一層向上できるように努力したい。当報告をするには時期尚早であると思うが、今後の整理・研究の方向性を定める上で当該資料を紹介したいと考え、できるだけ報告した。これを機会に先学の方々の御指導、御教授を頂ければ幸いです。

最後になりましたが、現地調査を含めて当報告を書くに際して、以下の方々にご教示・ご協力を頂いた。記して感謝の意としたい。

植木真吾氏 青木賢人氏 富山正明氏 中野由紀子氏 橋本澄夫氏 山本千穂氏



調査区遠景（西から）



B区第4面（上から）



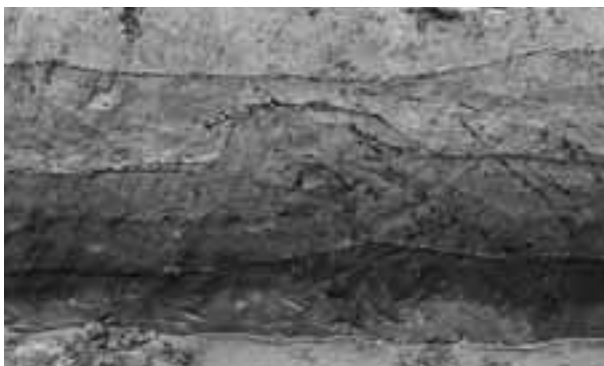
B区第4面（東から）



B区水田跡（西から）



B区第4面畦畔（北から）



B区第4面畦畔（北から）

注釈

- 1 当報告では、便宜的に北陸地方を福井県、石川県、富山県の範囲で捉える。
- 2 加茂遺跡周辺の地理的環境について青木賢人先生（金沢大学）、山本千恵氏（金沢大学学生）より御教示頂いた。
- 3 当報告では下層確認トレンチの断面図データは関係がないので報告しない。
- 4 畑跡の調査事例は、静岡県沼津市高尾上遺跡群等がある。

付記

北陸地方における弥生時代の水田遺構のある遺跡を紹介したい。どれもが整理作業途中のため、今回は検討を控え、提示するに留める。また、水田耕作を示唆する遺構として、用排水路、灌漑施設等があり、これらも含めて考えると、弥生時代の水田経営の実態により迫る事ができよう。今後の成果報告と資料の増加を待ちたい。

北陸地方における水田遺構集成			
遺跡名	所在地	立地	時期
下老子笹川遺跡	富山県福岡町	沖積地（複合扇状地扇端部）	弥生時代後期
加茂遺跡	石川県津幡町	沖積地（三角州）	弥生時代中期～後期
梅田 B 遺跡	石川県金沢市	沖積地	弥生時代後期
林・藤島遺跡	福井県福井市	沖積地	弥生時代後期

参考文献

- 金関 恕・佐原 眞編集 1988 『弥生文化の研究 第2巻 - 生業 - 』 雄山閣出版
- 下條信行編集 1989 『古代史復元4 弥生農村の誕生』 講談社
- 江浦 洋 1991 「弥生時代水田の総合理解のための基礎作業1」
『大阪文化財研究 第2号』（財）大阪文化財センター
- （社）石川県埋蔵文化財保存協会 1997 （社）石川県埋蔵文化財保存協会年報8
- 富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所 1997 埋蔵文化財調査概要 - 平成9年度 -
- 富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所 1998 埋蔵文化財年報（9）
- 兼田康彦 2000 「加茂遺跡」 『（財）石川県埋蔵文化財情報第4号』（財）石川県埋蔵文化財センター
- 本田秀生 2001 「加茂遺跡」 『（財）石川県埋蔵文化財情報第6号』（財）石川県埋蔵文化財センター
- 座主哲二 2002 「加茂遺跡」 『（財）石川県埋蔵文化財情報第8号』（財）石川県埋蔵文化財センター
- 長瀬 出 2002 「富山県における弥生集落の展開」
『富山考古学研究第5号』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 東日本の水田を考える会事務局 2002
第10回東日本の水田を考える会「登呂遺跡の再発掘成果と水田跡・畑跡研究の現状 - 資料集 - 」
- 藤 則雄 2002 「能登南端部 津幡～宇ノ気丘陵の地形・地質」
『文化財論考2号』 金沢学院大学美術文化学部文化財科

石川県埋蔵文化財情報

第9号

発行日 2003(平成15)年3月31日

発行 財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920 1336 石川県金沢市中戸町18番地 1
TEL 076 229 4477 FAX 076 229 3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 橋本礎文堂

© (財)石川県埋蔵文化財センター